

史跡埼玉古墳群保存修理事業報告

— 丸墓山古墳保存修理事業の報告 —

田 中 正 夫

I. はじめに

丸墓山古墳は、埼玉県行田市に所在する国指定史跡「埼玉古墳群」（昭和13年8月8日指定）に属する直径102mの円墳である。丸墓山古墳は、昭和43年以来墳頂部を公開しているが、見学者の増加に伴って、墳頂部等の土砂の流失が著しく、古墳本来の姿が失われつつあった。そこで、埼玉県教育委員会が主体となり、文化庁の国庫補助金の交付を受けて、昭和60年度から昭和62年度の3か年にわたり、保存修理事業を実施した。小稿は、保存修理事業の概要についての報告である。

II. 丸墓山古墳の概要

丸墓山古墳は、埼玉古墳群に属する円墳である。埼玉古墳群の立地する行田市周辺地域は、秩父山地に源を発する荒川が、南東方面に流れを変える荒川扇状地扇端東方にあたり、また、埼玉県の北部を画する利根川が南東方向に向かう地域でもある。利根川の右岸には妻沼・加須・中川低地が発達し、現荒川流域には荒川低地が発達している。これらの低地の中に大宮台地が存在する。行田市のある大宮台地の北方は、利根川、荒川等により、侵蝕・分断され、北西から南東へ延びる細長い台地となっている。また加須低地を中心とする「関東造盆地運動」による地盤の沈降現象とともに、各河川の氾濫による土砂の堆積土に覆われ、洪積台地は埋没する部分も多く、自然堤防的な微高地状の地形を呈する。従って見かけだけでは洪積台地と自然堤防の区別はつけにくい。埼玉古墳群はこうした洪積台地に築造された古墳群である。

現在埼玉古墳群のうち現存するものは、稲荷山古墳、二子山古墳、鉄砲山古墳など前方後円墳8基、丸墓山古墳、白山古墳などを合わせて十数基であるが、近年の発掘調査の結果、推定も含め、最低45基からなっていたことが判明している。埼玉古墳群は、古墳時代後期に属する古墳群であるが、後期としては大規模な前方後円墳が狭い地域に密集するのは、全国的にみても例が少ないことから、丸墓山古墳、稲荷山古墳など9基の古墳が、昭和13年8月に史跡に指定されている。

丸墓山古墳については、昭和48年度と昭和60年度の二度にわたり、周堀部分の確認調査が行われている。昭和48年度調査は、昭和43年度に撮影した航空写真に写し出された、前方部らしい痕跡の確認および周堀の範囲・規模を確認するためのトレンチ調査であった。その結果、周堀は幅約37mと考えられ、前方部と思われたものは、新しい溝状遺構であることが判明した。



第1図 丸墓山古墳の位置と周辺の主な古墳時代遺跡

- | | | | | |
|---------|----------|---------|----------|-----------|
| A 光屋敷遺跡 | G 小見古墳群 | M 鴻池遺跡 | 4 酒巻1号墳 | 10 丸墓山古墳 |
| B 中条古墳群 | H 若小玉古墳群 | N 袋・台遺跡 | 5 とやま古墳 | 11 愛宕神社古墳 |
| C 東沢遺跡 | I 小針古墳群 | 1 女塚古墳 | 6 大稲荷1号墳 | 12 宝養寺古墳 |
| D 酒巻古墳群 | J 埼玉古墳群 | 2 鋸塚古墳 | 7 真観寺古墳 | 13 三嶋神社古墳 |
| E 斎条古墳群 | K 高畑遺跡 | 3 大塚古墳 | 8 地藏塚古墳 | 14 高山古墳 |
| F 新郷古墳群 | L 武良内遺跡 | | 9 八幡山古墳 | |



第2図 埼玉古墳群全測図 (1 : 5,000)

昭和60年度の調査は、周堀内側立ち上がり部の確認を目的とするもので、墳丘北側と南側に5本のトレンチを設定して調査した。それによると、周堀内側立ち上がり部での直径は10.5mとなり、調査された範囲内では、前方部や、造り出しはなく、円墳と考えられている。また、昭和60年度に調査した各トレンチでは、周堀の覆土中に多量の河原石が検出され、葦石が崩落したものと考えられている。遺物は円筒埴輪がほとんどであるが、形象埴輪片を若干含む。埴輪の形態から6世紀前半の築造と考えられている。

Ⅲ 保存修理事業の経過

1. 事業に至るまでの経過

丸墓山古墳は、昭和43年から着手した埼玉古墳群を中心とした史跡公園「さきたま風土記の丘」の整備に伴い、稲荷山古墳とともに墳頂部が公開されてきている。昭和53年9月に、稲荷山古墳出土品の保存処理を実施した際、1本の鉄剣の表裏に、115文字の金象嵌の銘文が発見され、稲荷山古墳は一躍注目をあびることとなった。この発見と、また「さきたま風土記の丘」の整備の進捗により、「さきたま風土記の丘」を訪れる人が激増した。そのため、墳頂部を公開している稲荷山古墳と丸墓山古墳では、墳頂部とその周辺や丸太階段周辺が変形をきたし、一部墳丘が崖面となっていた部分の崩壊も進行してきた。これらの損傷に対し、埼玉県では、緊急に保存対策を講じるため、昭和57年度から史跡埼玉古墳群保存修理事業として国庫補助金の交付を文化庁にお願いしてその対策を進めることとした。

昭和57年度から3か年計画で稲荷山古墳の保存修理事業を実施した。稲荷山古墳は、昭和43年8月に発掘調査されて以来、後円部において検出された礫礮と粘土礮に覆屋を設け、実物を露出展示してきたが、見学者の増加とあいまって、主体部の劣化が進み、前方部が削平された部分の崩壊が進行してきたため、保存修理を行ったものである。

稲荷山古墳の保存修理事業にひき続き、丸墓山古墳の保存修理事業が3か年で計画された。丸墓山古墳は、墳頂部の土砂の流失が著しく、また墳丘南側の崖面の崩壊も進行していたため、第1年次に墳頂部保護工事、第2年次に墳丘南斜面崩壊防止第1次盛土、第3年次に南斜面崩壊防止第2次盛土及び正面階段の整備を計画し、事業を実施した。実施にあたっては、有識者の意見を取り入れながら進めるために「丸墓山古墳保存整備協議会」を設置し、事務局を埼玉県教育局指導部文化財保護課と埼玉県立さきたま資料館に置いた。「丸墓山古墳保存整備協議会」の構成は別掲のとおりである。

2. 事業の経過

昭和60年度

第1回「丸墓山古墳保存整備協議会」（以下「協議会」と記す）で、丸墓山古墳の保存修理について、(1)墳頂部盛土・修景 (2)南斜面崩壊防止 (3)正面階段整備 の方針が示された。また昭和60年度には、墳頂部の盛土・修景工事を実施することになり、実施についての意見を伺った。第2回「協議会」では、墳頂部保護工事の具体的な内容と、今後の整備について話し合われた。なお、墳頂部保護工事は昭和61年1月7日着手し、昭和61年3月15日終了した。

昭和61年度

第1回「協議会」で、墳丘南斜面崩壊防止盛土工事に先立つ墳丘確認調査の実施方法について、意見を伺った。第2回の「協議会」では、墳丘確認調査の結果をもとに、墳丘南斜面崩壊防止第1次盛土工事の実施方法について話し合われた。墳丘確認調査は、昭和61年10月6日から11月11日である。なお、工事は昭和62年1月8日から着手し昭和62年3月10日終了した。

昭和62年度

第1回「協議会」で、墳丘南斜面崩壊防止第2次盛土工事に先立つ墳丘確認調査の実施方法と昭和62年度工事の概要について話し合われた。第2回の「協議会」では、墳丘確認調査の成果をふまえ、墳丘南斜面崩壊防止盛土部のテラスをどのようにするか、また正面階段の整備、説明板設置について意見を伺った。墳丘確認調査の期間は昭和62年9月16日から10月2日である。なお、工事は昭和62年12月26日に着手し、昭和63年3月4日終了した。

丸墓山古墳保存整備協議会の構成

- 委員(座長) 柳田敏司(埼玉県文化財保護審議会委員 昭和60～62年度)
- 委員 岩崎卓也(筑波大学教授 昭和60～62年度)
- “ 大塚初重(明治大学教授 昭和60～62年度)
- “ 亀井正道(東京国立博物館 昭和60～62年度)
- “ 関根貞次(埼玉県住宅都市部北部公園建設事務所長 昭和60・61年度)
- “ 熊倉実(埼玉県住宅都市部北部公園建設事務所長 昭和62年度)
- “ 田中一郎(埼玉県文化財保護審議会委員 昭和60～62年度)
- “ 樋口清治(東京国立文化財研究所 昭和60～62年度)
- 指導者 加藤允彦(文化庁文化財保護部記念物課文化財調査官)
- 事務局 埼玉県教育局指導部文化財保護課
- “ (実施) 埼玉県立さきたま資料館

〈保存修理事業経過表〉

年度	工 事	内 容	「協議会」	事 業 費
60	土管理施設工 植栽工 排水工 雑工	盛土(墳頂部盛土) 木柵、丸太階段、三角点保護 ドウダンツツジ、オカメザサ、張芝 U字側溝、組合せ暗渠、集水柵 石塔移設、見学者通路(芝防護マット)他	(1) 60. 11. 1 (2) 61. 3. 4	1,000万円
61	土工 雑工	盛土(南斜面第1次盛土)、段切、筋芝 園路付替、外周柵	(1) 61. 6. 26 (2) 61. 11. 28	1,000万円
62	土管理施設工 植栽工 雑工	盛土(南斜面第2次盛土)、段切、筋芝 丸太階段、木柵 張芝 石塔移設他	(1) 62. 7. 3 (2) 62. 11. 6	1,000万円

IV. 保存修理工事

1. 昭和60年度の工事

昭和60年度は、墳丘の流失の著しい墳頂部の盛土及び植栽による修景と排水施設設置を実施した。

〈盛土工〉

盛土は流失したことが確認できる高さまで復原することとし、標高36.0mを上限とした。盛土上面は平坦面とし、中央から15%の勾配をもたせ、雨水を周囲に巡るコンクリート製U字側溝へ導くようにした。墳丘の現状は、南側に向かってかなり傾斜しているため、盛土は、+10cmから+110cm厚となった。盛土と現墳丘へのすりつけ部の傾斜は、墳頂付近の現傾斜面の平均傾斜に合わせ、盛土平坦面の直径は24mの円形プランを設定した。盛土はローム土を使用し、機械により墳頂へ運搬し、小型機械及び人力で転圧しながら盛り上げた。

〈管理施設工〉

墳頂部盛土平坦部から、盛土及び墳丘傾斜面への見学者の立ち入り遮断のために、木柵を設置した。木柵は、防腐処理（CCA注入材）を施し、焼き丸太仕上げしたもので、クレモナロープ二段張りとした。平坦面外周を巡るコンクリート製U字溝の内側に設置し、階段部両側へと続けた。

現階段からのアプローチとして丸太階段を設置した。階段は防腐処理材（CCA注入材）を用い、踏面はローム土を使用し、表面は砂利を敷いた。なお、墳丘上には三角点があったため、三角点標柱を保護するため、円形コンクリート管を土中に埋設して蓋をかけた。

〈植栽工〉

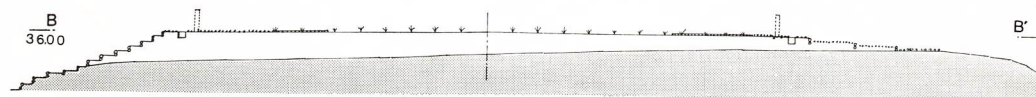
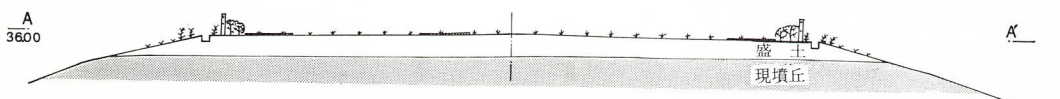
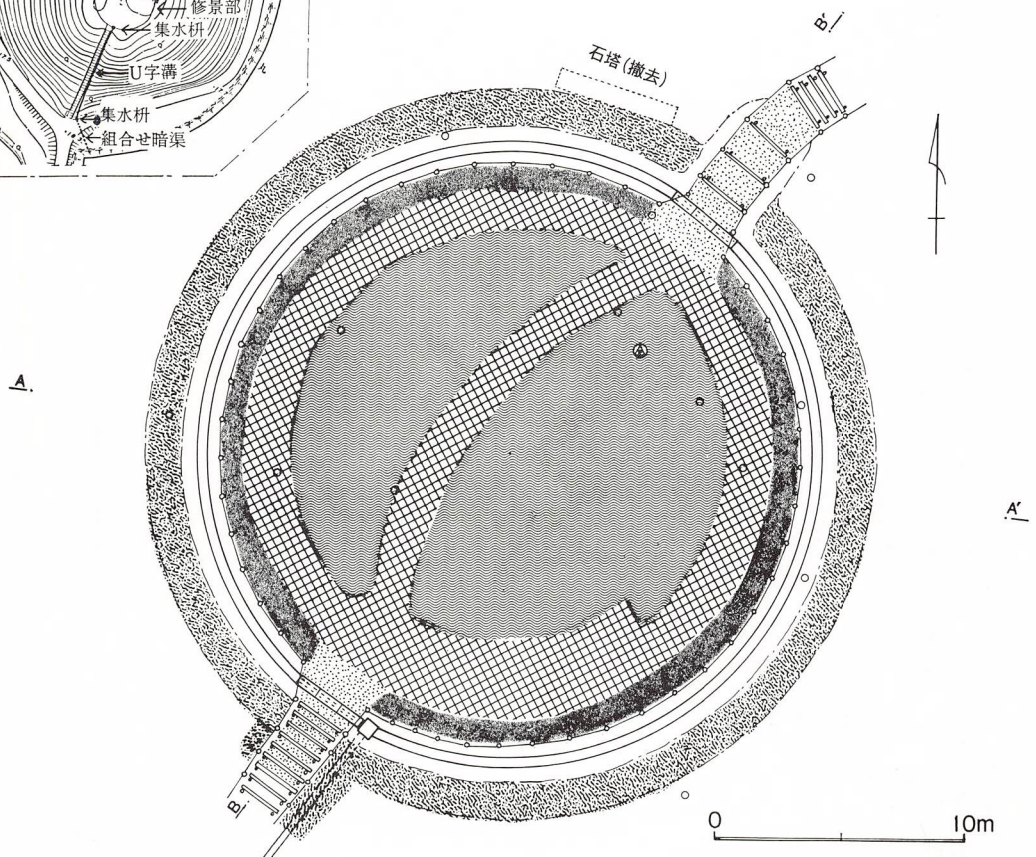
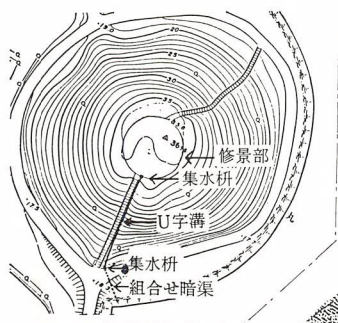
盛土部分の景観を整えるために、植栽を施した。平坦面は張芝を施し、見学者の踏みつけによる芝のいたみを防ぐため、平坦面の周囲と中央に見学者コースを設け、芝防護マット（プラスチック製）を敷設した。見学者コースは幅約1.8mとしたが、一部眺望のよい南側部分は約3.6mとした。木柵と張芝の間はドウダンツツジを巡らせ、U字溝を隔てた木柵の外側にはオカメザサを、オカメザサの周囲の盛土斜面には張芝（野芝）を植栽し、盛土表面を保護した。

〈排水工〉

墳頂部の雨水による侵蝕をさけるため、平坦面周囲にコンクリート製U字側溝を設け、正面階段脇から墳丘下へ流れるように設置した。墳丘裾部では、見学路を横断するため、見学路部分は組合せ暗渠とし、復原されている周堀へ流れるようにした。また墳頂部から階段脇への部分と、墳裾部に集水枡を設けた。

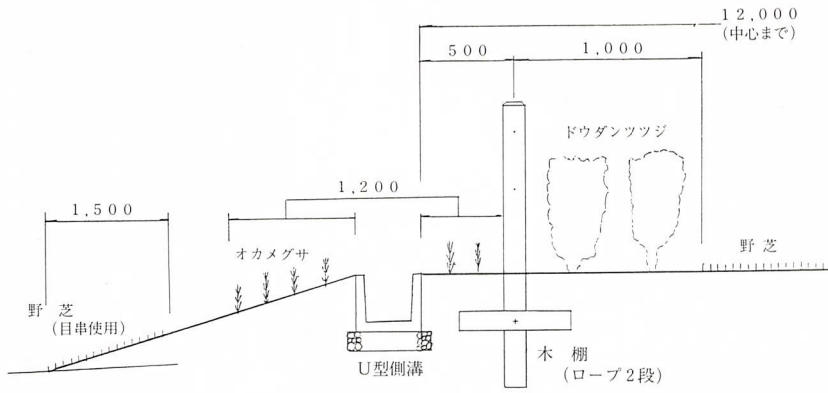
〈工事量〉

土	工	掘削	27m ³	埋戻し	17m ³	盛土	507m ³	盛土材運搬	507m ³
管理施設工		木柵工	81m	丸太階段工	10段	階段部砕石工	13.2m ²	三角点保護工	一式
植栽工		ドウダンツツジ	378株	オカメザサ	88m ²	張芝工	469m ²		
排水工		U字側溝	115.4m	U字側溝ふた架渡し	6m	U字側溝巻立て	1箇所		
		組合せ暗渠	13m	集水枡	2基				
雑工		石塔移設	7基	既設枡高上げ	1箇所	見学者用通路	157.8m ²	U字側溝覆土工	4m

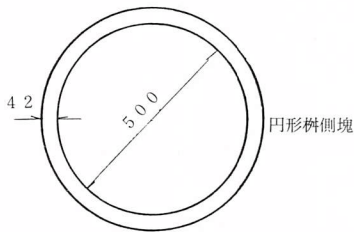


- | | | |
|---------|---------|--------|
| 貼芝 | 筋芝(野芝) | ロープ付木柵 |
| 貼芝防護マット | 砂利敷 | 丸太階段 |
| ドウダンツツジ | U字溝・集水枡 | 三角点 |
| オカメザサ | U字溝蓋 | 樹木(既存) |

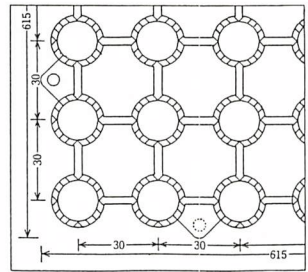
第3図 墳頂部保護工事平面図



周辺部詳細図

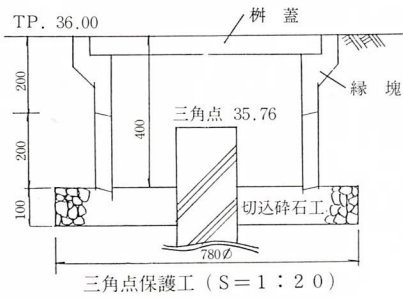


型名	
寸法mm	615
高さmm	18
平均肉厚mm	3
面積cm ²	3,780
重量g	1,450
包装単位	10

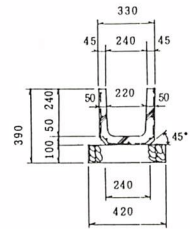


プロテクトマット規格

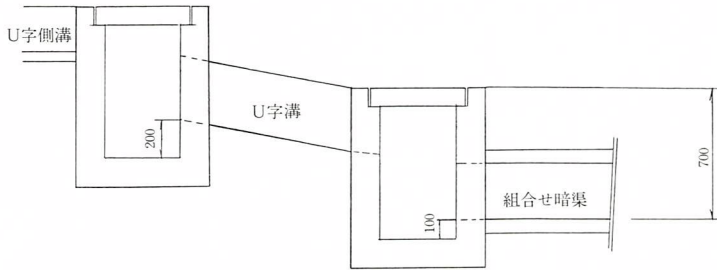
見学者通路用プロテクトマット



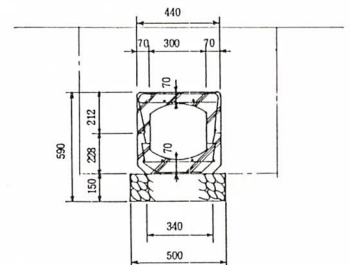
三角点保護工 (S=1:2.0)



U字側溝 (S=1:4.0)



排水施設接続略図 (S=1:4.0)



組合せ暗渠 (S=1:4.0)

第4図 墳頂部保護工事詳細図

2. 昭和61年度の工事

昭和61年度は、墳丘南側の崩壊部分の崩壊防止第1次盛土工事を行った。なお盛土工事に先立ち工事予定箇所墳丘の状況を確認するため、墳丘確認調査を行った（調査については第V章参照）。

〈盛土工〉

盛土は、墳丘南斜面の崩壊防止を目的としたもので、南側斜面の崖面になっていた部分に施した。盛土裾部の範囲は、昭和60年度丸墓山古墳周堀範囲確認調査で確認された、周堀の立ち上がりから3m程墳丘寄りになるように設定した。盛土裾部のラインは、昭和60年度に施工した墳頂部保護工事の際設定した墳丘仮中心点から半径48mである。盛土の両脇は、現墳丘にすりつけるようにし、景観上違和感のないよう配慮した。また第1次盛土の高さは標高23mまでとした。

盛土と、現墳丘面との境で滑落が生じないよう、人力により段切りを行った。盛土材は良質土を使用し、大型機械で転圧しながら盛り上げ、大型機械の使用できない部分については、小型機械並びに人力で転圧した。また、盛土の表面には保護のため筋芝を施した。

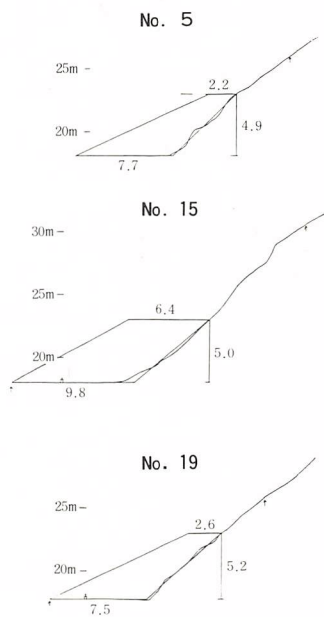
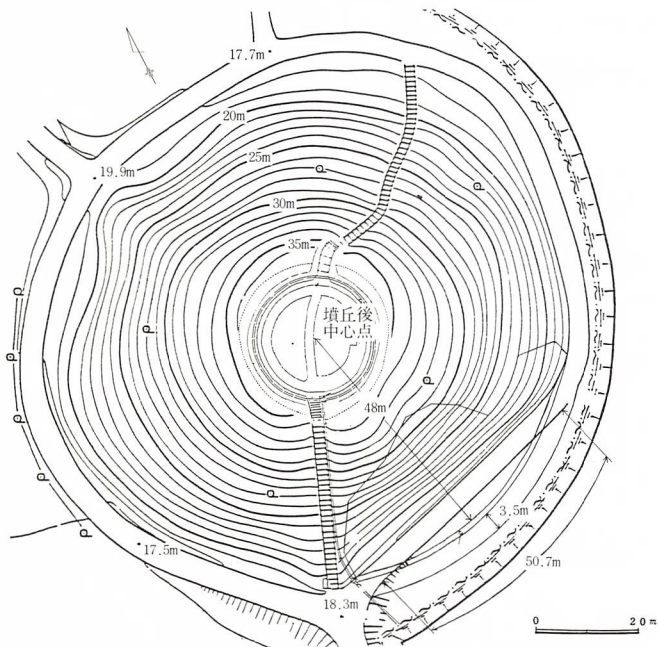
〈管理施設工〉

丸墓山古墳の周囲には、見学者用の通路が設けられていたが、盛土範囲の通路が埋まったため、見学者通路の付け替えを行った。通路は碎石敷とした。

また、盛土の周囲に、新たに木柵を設置し、通路から盛土表面への見学者の立ち入りを遮断し、見学者の安全とともに、盛土表面の保護を図った。

〈工事量〉

土 工 盛土工 1,356.3^m 段切工 455.8^m 筋芝工 606.2^m
 雑 工 園路付替工一式 外周柵工一式



第5図 墳丘南斜面崩壊防止第1次盛土工事 (S=1:1500)

3. 昭和62年度の工事

昭和62年度は、墳丘南斜面崩壊防止第2次盛土及び正面階段の整備を行った。また、第2次盛土工事に先立ち、盛土範囲の墳丘の状況を確認するため、第2次墳丘確認調査を行った（調査については第V章参照）。なお、正面階段脇に説明板を設置し、見学に供した。

〈盛土工〉

盛土は、昭和61年度に施工した部分をさらに40cm盛り上げ、標高23.4mとして、1m弱のテラスを設け、そこから崩落面上端まで盛り上げた。テラス部を標高23.4mとしたのは、現墳丘東側にみられるテラス状部分の標高に合わせたものである。テラスは、現墳丘では東側が広く、西側には認められない（表面上）ため、1m弱程度としたもので、東側は徐々に広げ現況に合うように景観を整えた。盛土の西側及び上端は現墳丘にすりつけるようにしたが、中央部だけはそのまま現墳丘にすりつけると、小さな谷状のくぼみができるため、標高32mまでは周囲の傾斜に合わせて盛り上げ、標高32mで傾斜変換点を設け緩傾斜として現墳丘にすりつけた。

盛土範囲は、昭和61年度同様、現墳丘と盛土の境界面で滑落がないよう人力により段切りを行った。段切りの高さは30cmを基本とした。盛土材には良質土を用い、クラムシェルバケットで土を運搬し小型機械及び人力で敷きならし、締め固めを行い、充分転圧した。また、盛土傾斜面の表面には、保護のため筋芝を、平坦面には野芝により張芝を施した。

〈階段工〉

正面階段は、かなり破損していたうえ、傾斜に合わせて設けられていたため、蹴上げが40cm以上にもなる部分があるなど、登りづらい部分もあった。このため、盛土を施し階段の勾配が一定となるように設計、施工した。蹴上げは18cm、踏み面38cm（丸太直径を含めて）を基本とし、登りやすくなるように配慮した。また盛土部に設けたテラスと合うように1.5mの踊り場を設け、見学者の安全を図った。階段に使用した丸太材は防腐処理（CCA注入材）を施したものをを用い、踏み面は良質土を使用した。

〈木柵工〉

階段両脇にはクレモナロープ二段張りの木柵を設置した。木柵は防腐処理（CCA注入材）を施し、景観をそこなうことのないよう表面焼き丸太仕上げにしたものをを用いた。階段登り口は、組み替えた石段にそわせて墳丘裾部に続けた。墳丘裾部は、見学者が丸墓山古墳へ向かう通路として多く利用する古墳南側の石田堤上からの景観を考慮して、東西に6スパンずつ続けて設置した。

〈石積工〉

正面階段登り口には既設の石段があったが、階段の向きと合っていなかったため、組みかえ、階段の向きと合わせ、同時にやや広く、ゆるやかな扇状となるようにし景観を整えた。

〈植栽工〉

正面階段両側の盛土部分及び南斜面盛土部分に設けたテラス表面の保護・修景のため、張芝を施した。

〈雑工〉

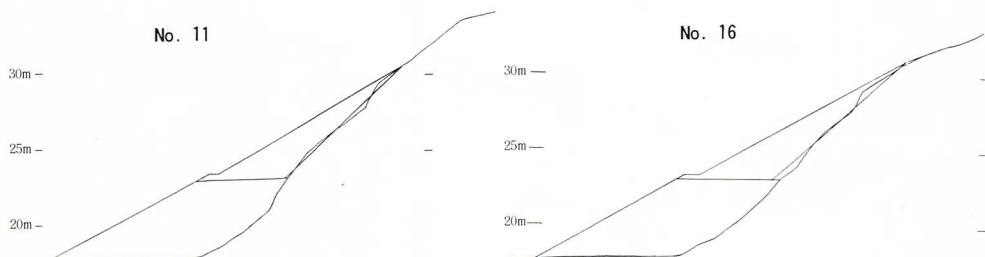
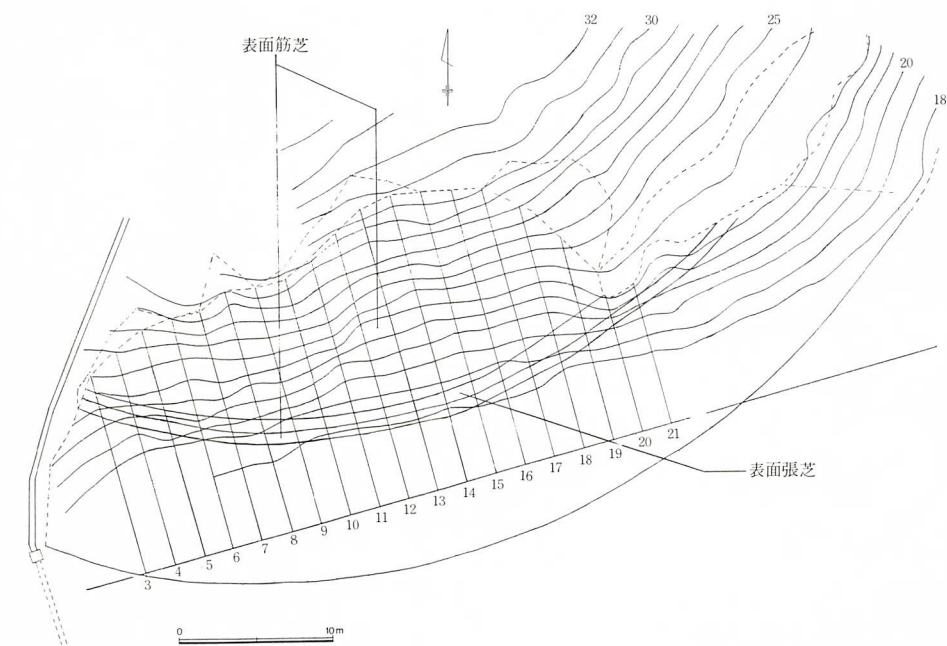
正面階段脇にあった石塔を墳丘裾部に移設し、また、いたみの多い旧説明板を撤去した。

〈説明板製作・設置〉

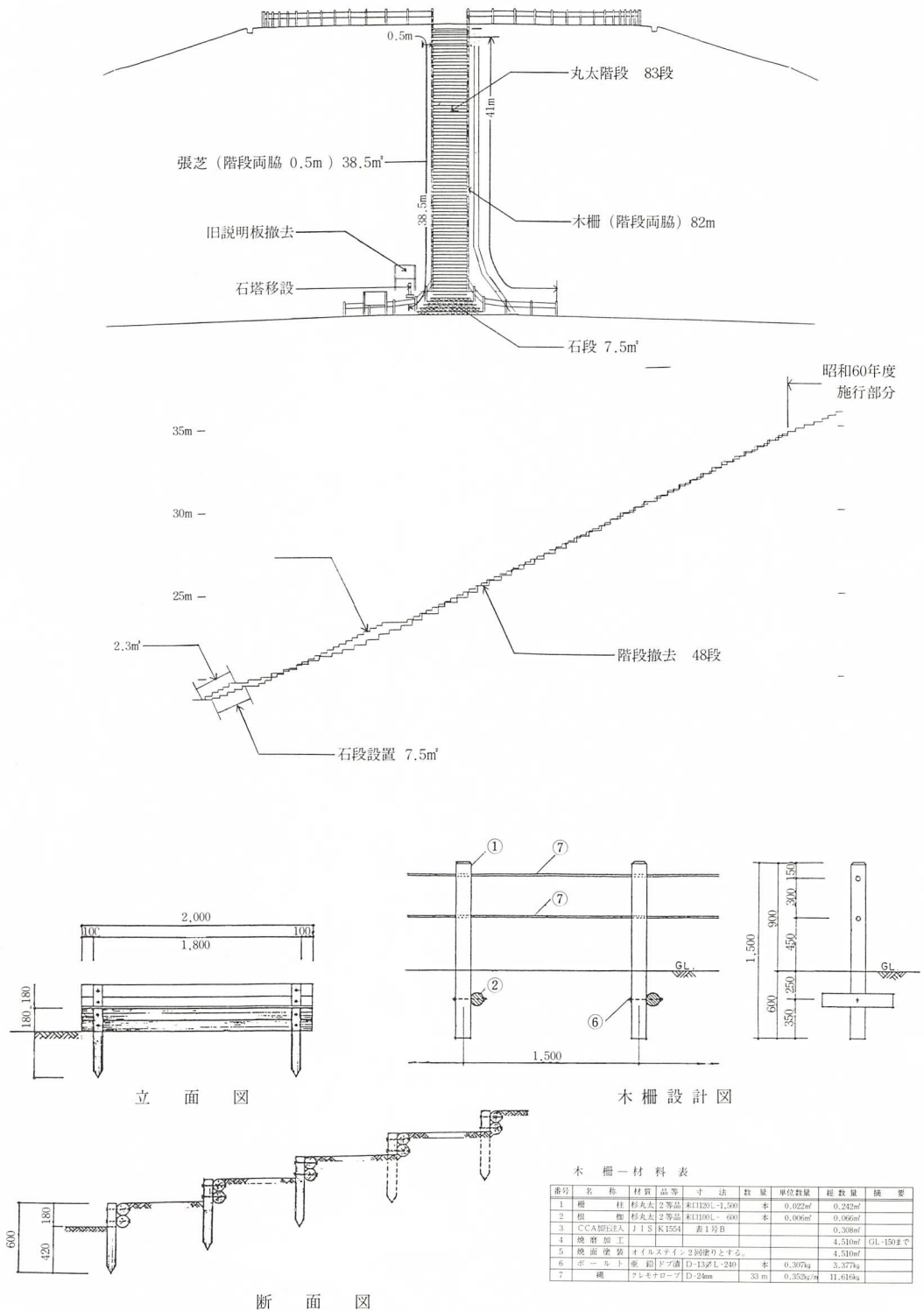
説明板は、F・R・P成形板（1,300×900×20mm）を基板として、銘板にはアルミに文字を焼きつけたもの（アルフォト 1,200×800×0.5mm）を使用した。両脇2本の支柱で支え、支柱はステンレス角柱（75mm）を用いボルトで固定した。説明板は正面階段左手の墳丘裾部に、銘板の中央が地面から約1,400mmの高さになるように設置した。

〈工事量〉

- 土 工 盛土工 488m³ 段切工 310.8m² 筋芝工 410m²
 管理施設工 丸太階段工83段 木柵工86m 階段部土工18.6m³ 旧階段撤去工84m
 石積工 7.5m² 石積とりこわし 2.3m³
 植 栽 工 張芝工73m²
 雑 工 石塔移設1基 旧説明板撤去工1基



第6図 墳丘南斜面崩壊防止第2次盛土



第7図 正面階段整備工事詳細図

V. 墳丘確認調査

1. 調査の経過

(1) 調査に至る経過

丸墓山古墳の保存修理事業は、昭和60年度から開始された。昭和60年度の工事は、墳頂部の盛土と修景であった。盛土は、墳丘の保存という観点から調査は行わず、現墳丘から復原できる高さを上限として、施工した。昭和61年度と昭和62年度に施工した墳丘南斜面崩壊防止盛土工事は、盛土面と現墳丘面の境部分が土砂の崩壊の原因になる可能性があると考えられたため、現墳丘と盛土のなじみをよくするために、段切工を施工する必要性が生じた。段切工は墳丘表土部分を人力で施工するため、墳丘構築土への影響は少ないものと予想されたが、盛土に先立ち、墳丘構築土の状況を知る必要があり、また、今までの調査では、テラスの有無や外部施設の状況が全く不明で、本来の古墳の形状を知る必要もあったため、盛土予定範囲の墳丘確認調査を実施することとなった。調査は、墳丘構築土の断面観察と、テラス部での遺構の状況の確認を主とし、トレンチを設定して行った。なお、盛土工事が2年次にわたり行われたため、墳丘確認調査も2年次にわたり実施した。昭和61年度の墳丘確認調査は、昭和61年10月6日から昭和61年11月11日まで、昭和62年度の調査は、昭和62年9月16日から昭和62年10月2日まで行った。

(2) 調査の経過

〈昭和61年度の墳丘確認調査〉

- 10月6日 調査対象区に安全柵を設ける等の準備作業を行う。
- 10月8日 基準点・水準点測量開始。
- 10月9日 調査区の設定を行う。崖面裾部に西からA・B・C-1トレンチを。C-1トレンチ延長線上の墳丘テラス状部分にC-2トレンチを設定し、掘り下げ作業を開始する。
- 10月14日 C-2トレンチ南端付近に礫を検出。人為的に並べられたものと思われる。
- 10月15日 Bトレンチの発掘作業開始。
- 10月17日 C-2トレンチを東側に拡張する。またC-2トレンチ東方にDトレンチを設定し調査を開始する。
- 10月22日 崖面裾部にEトレンチ（A・Bトレンチの間）とFトレンチ（B・C-1トレンチの間）を設定し調査を開始する。
- 11月5日 調査区及びセクションポイントの実測を行う。
- 11月6日 調査区の遠景及び各トレンチ土層断面の写真撮影を行い、調査区の埋め戻し作業を開始する。
- 11月11日 埋め戻し作業終了後、器材等を撤去し、調査を終了する。

〈昭和62年度の墳丘確認調査〉

- 9月16日 トレンチを設定し調査を開始する。トレンチは、昭和61年度に施工した盛土上方に、西からG・H・Iトレンチ（呼称は昭和61年度トレンチに続けた。）の3本である。
- 9月18日 Iトレンチの発掘作業を行う。埴輪小片が若干出土したが、すべて表土あるいは崩落

土中である。

9月21日 Gトレンチ発掘作業開始。

9月22日 Hトレンチ発掘作業開始。墳丘崩落面上方にJトレンチを設定、各トレンチを並行して作業を進める。

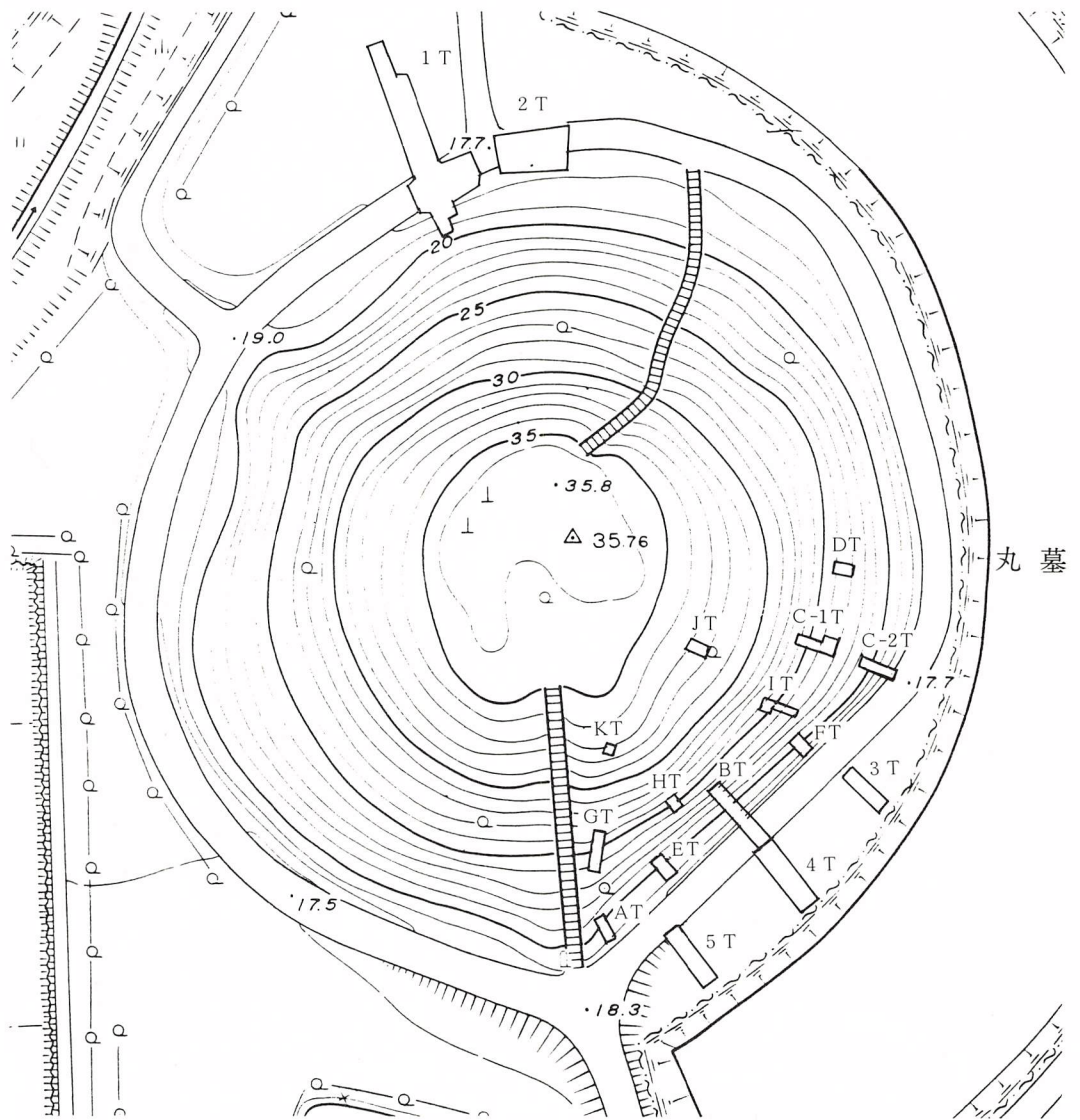
9月24日 Gトレンチにおいて礫を検出したが、崩落土中にあり、原位置を保っていないと判断された。

9月28日 Gトレンチの上方にKトレンチを設定し、発掘作業を開始する。

9月29日 各トレンチの位置の実測を行う。

10月1日 調査区の全景写真撮影を行い埋め戻しを開始する。

10月2日 埋め戻し作業終了後、器材等をかたづけ墳丘確認調査を終了する。



第8図 墳丘確認調査トレンチ位置図

2 調査の成果

(1) 遺 構

昭和61年度の調査

調査は、墳丘南側斜面の墳丘が削られて崖面となっている部分を対象区とした。トレンチの呼称は西からA・B・C-1トレンチである。A・C-1トレンチは崖面の両端に設定した。Bトレンチは崖面の中央部に設定したもので、トレンチ東側の壁が、昭和60年度周堀確認調査の際の第4トレンチ東壁に続くようにした。墳丘テラス状部分には、C-1トレンチ延長線上にC-2トレンチを設定し調査を開始した。その後、C-2トレンチで配石遺構が検出されたため、C-2トレンチを拡張するとともに、C-2トレンチ東方にDトレンチを設けた。また、墳丘下部に設定した3本のトレンチにおいて、墳丘構築土下に旧表土と思われる土層を検出したため、A・Bトレンチの間にEトレンチを、B・C-1トレンチの間にFトレンチを設定した。

Aトレンチは、正面階段脇に設定したものである。ここは墳丘測量図でみると、コンターラインが階段部とともに外側に張り出しており、墳丘の遺存の比較的良好な部分と思われたが、断面観察では、明らかに、墳丘立ち上り部は削られていることが判明した。C-1トレンチでも状況は似ており、やはり立ち上り部は削られていた。

A・E・B・F・C-1の各トレンチで、墳丘構築土下に旧表土と思われる土層を確認した。昭和60年度の周堀範囲確認調査で、丸墓山古墳はローム基盤上に築かれていることが確認され、また、第1トレンチ墳丘裾部分では旧表土と思われる層を検出している。今回、墳丘下部の各トレンチで検出した旧表土と思われる層は、非常に締った粘質の暗灰褐色土層であった。この層の上部近くにやや白く見える1~3cm程の帯状の土層があり、この周辺に明黄灰色粒子の小ブロックが混入していた。Fトレンチでは特に顕著で、部分的には厚さ2cm程あった。暗灰褐色土層の下は灰褐色土層暗褐色土層と続き、さらにその下が黄褐色のローム層となる。その各層は漸移的に移行するものであった。なお、明黄灰色の粒子は肉眼での観察では榛名二ツ岳降下火山灰(F A)と思われるものであった。Aトレンチにおいては、この層の2cm程下から鬼高期の古段階の土師器杯片が出土している。

各トレンチで検出した墳丘の構築土は、すべて古墳周辺の基盤層(ローム層から旧表土まで)を利用したと思われるものであった。盛土は各種の土がブロックか、あるいは粒子で混入しており、また混入する量により細分できるが、大別して3種類に分けられる。黄褐色土を主体としたもの、暗褐色土・灰褐色土を主体としたもの、暗灰褐色粘質土を主体としたものである。調査した範囲では、黄褐色土を主体としたものや、暗褐色土・灰褐色土主体の層は、概して比較的厚い凸レンズ状の斜めの盛土であり、暗灰褐色粘質土主体の盛土は比較的薄い帯状の盛土が多い。凸レンズ状の斜めの盛土は、各トレンチの断面で傾斜する方向が異なり、またトレンチによっては南北に傾斜する場合、東西に傾斜する場合等さまざまである。盛土は基本的には黄褐色土や暗褐色・灰褐色土主体の盛土と、帯状の黒褐色粘質土主体の盛土を交互に繰り返しているものと思われる。

C-2・Dトレンチでは、配石遺構を検出した。両トレンチを設定した墳丘テラス状部分先端近くで検出されたものである。C-2トレンチにおいては、4列(部分的に5列)円周と平行する形

で検出された。石列はテラス状部分の先端に向かって緩やかであるがレベルが下がり、確認された部分では、テラス先端下部の斜面上に、斜面に対し垂直に礫をさしたような状況で検出された。また、礫と礫は間隔をあけて置かれ、礫の位置が、一列おきに互い違いになるよう配されていた。Dトレンチでは、このような明瞭な規則的配置ではなかったものの、テラス状部分先端部の緩斜面上で礫が検出された。

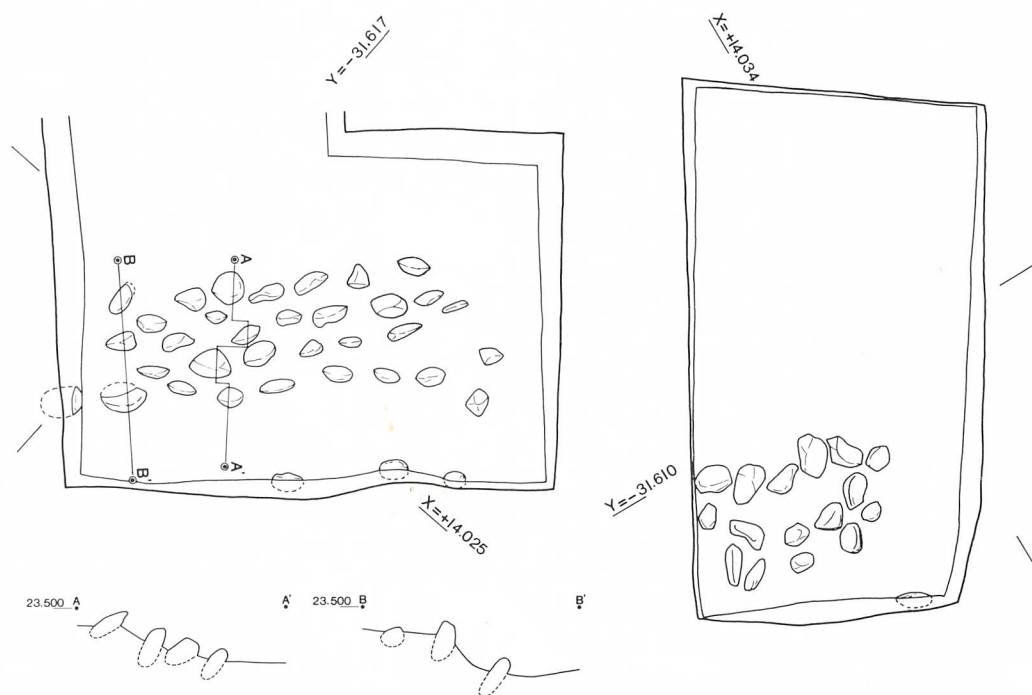
昭和62年度の調査

昭和61年度に盛土を施した部分の上方(標高23m以上)を調査対象区とした。調査は、昭和61年度同様、トレンチ調査により、墳丘構築土の状況を確認することを目的とした。第1次盛土の上方に西からG・H・Iの3本のトレンチを設定し、その後墳丘崩落面の上部にJ・Kの2本のトレンチを設定して調査を実施した。

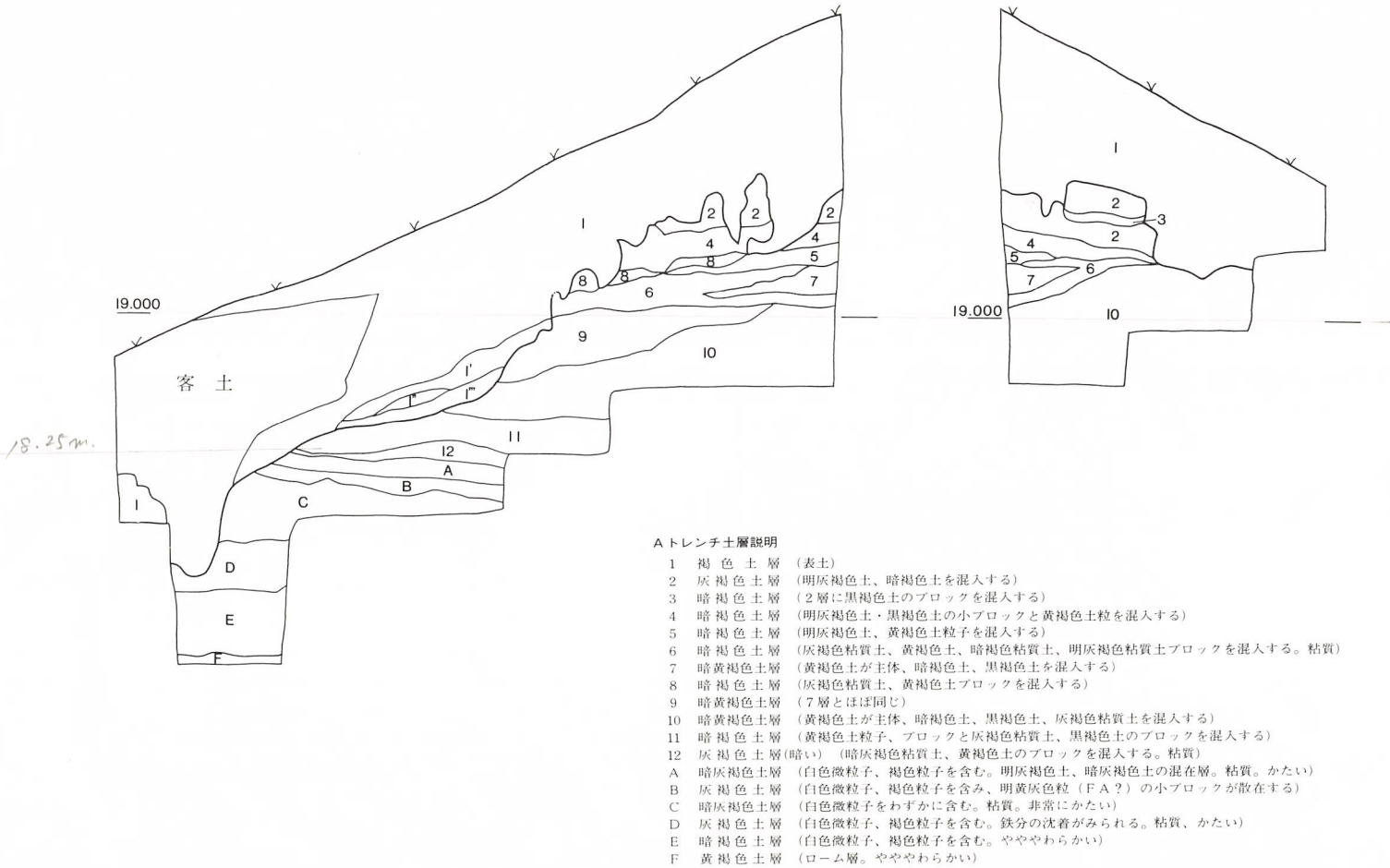
調査開始後Gトレンチで、数個の礫を検出したが、いずれも表土中にあり、原位置を保つものではなかった。また、Gトレンチの土層断面観察の結果、中央付近において、明灰色粘質土と、ロームブロックを含んだ土層が交互にほぼ水平に盛土されている部分が認められた。

墳丘中段テラス部分に設定したIトレンチでは、遺存している墳丘構築土上面は、ほぼ水平に近い状況で検出されたが、上部からの崩落土と表土は、墳丘中心側が著しく厚いものであった。また、トレンチの範囲では、墳丘構築土が立ち上がる部分は検出されなかった。

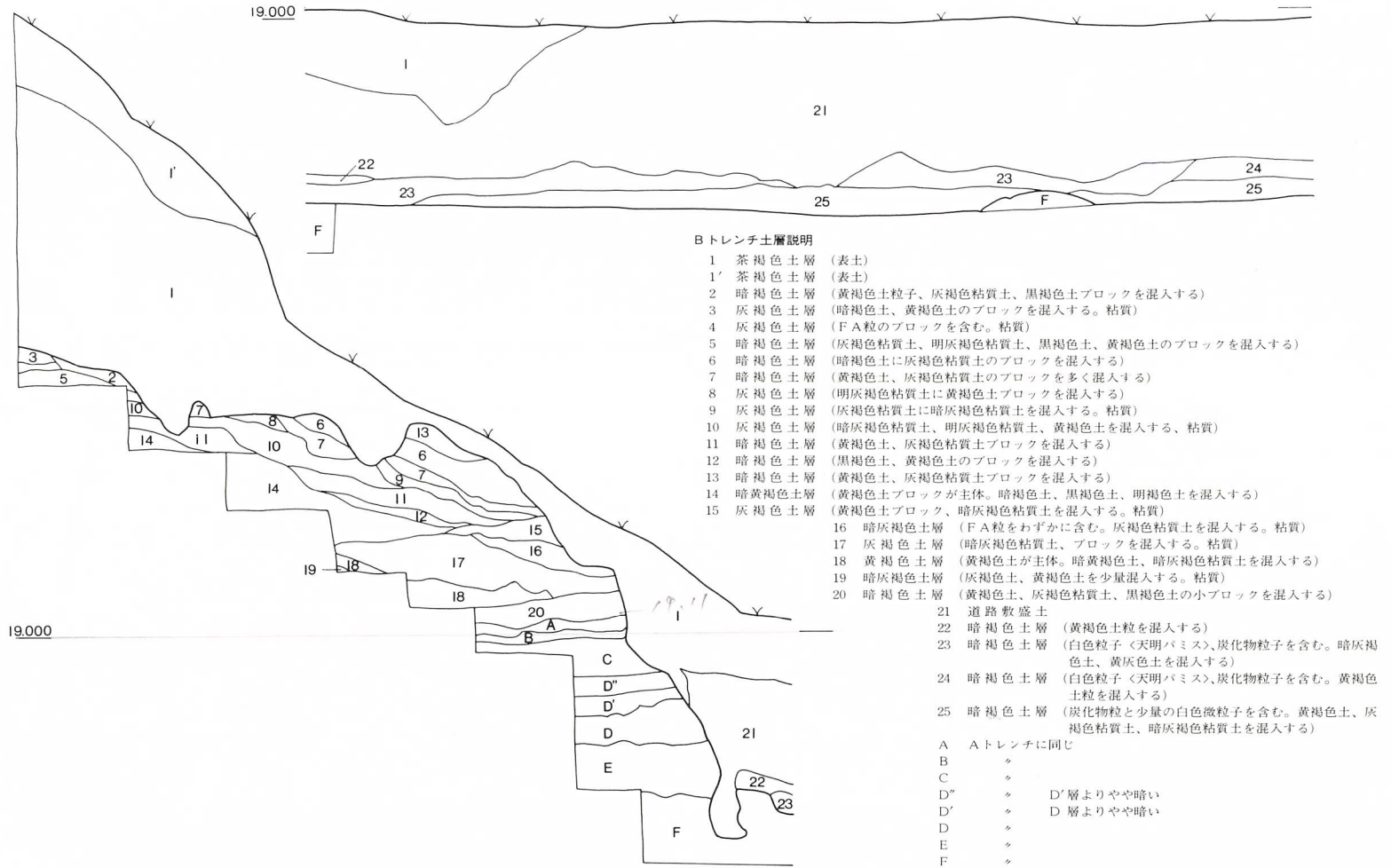
各トレンチで確認された墳丘構築土は、Gトレンチ中央部を除き、基本的には黄褐色土や暗褐色土を主体とした比較的厚い凸レンズ状の斜めの盛土と、暗褐色粘質土を主体とした帯状の土層が交互に繰り返されているもので、昭和61年度墳丘確認調査で確認した状況に近いものであった。



第9図 C-2、Dトレンチ平面図



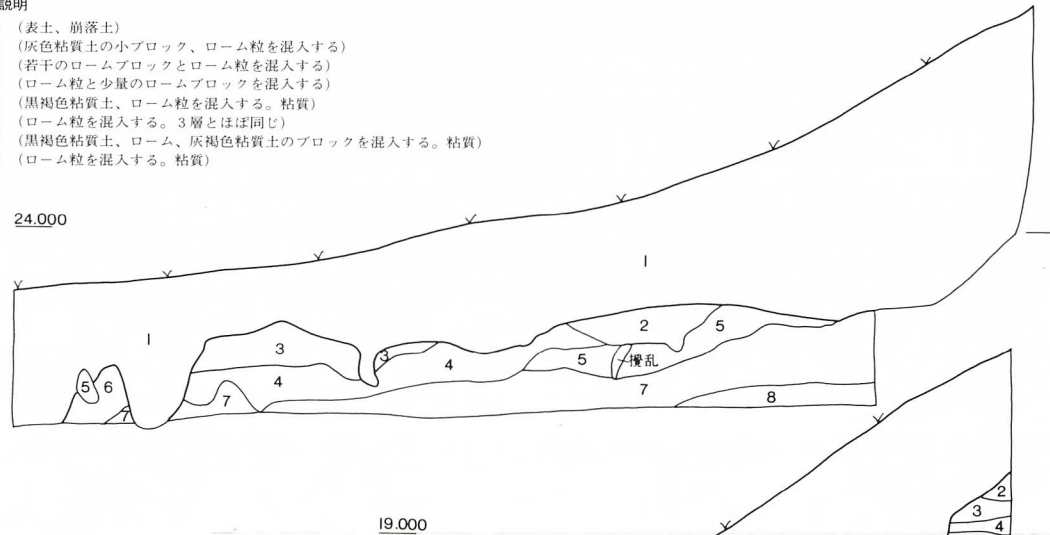
第10図 Aトレンチ土層断面図 (1 : 40)



第11図 Bトレンチ土層断面図 (1:40)

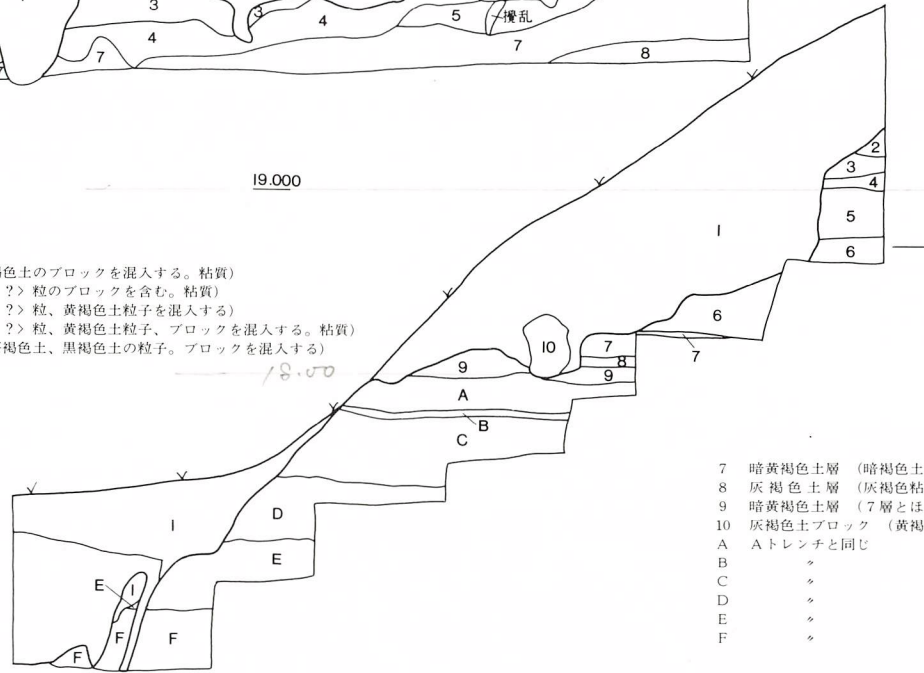
C-2 トレンチ土層説明

- 1 茶褐色土層 (表土、崩落土)
- 2 暗褐色土層 (灰色粘質土の小ブロック、ローム粒を混入する)
- 3 暗褐色土層 (若干のロームブロックとローム粒を混入する)
- 4 暗褐色土層 (ローム粒と少量のロームブロックを混入する)
- 5 灰褐色土層 (黒褐色粘質土、ローム粒を混入する。粘質)
- 6 暗褐色土層 (ローム粒を混入する。3層とほぼ同じ)
- 7 暗褐色土層 (黒褐色粘質土、ローム、灰褐色粘質土のブロックを混入する。粘質)
- 8 灰褐色土層 (ローム粒を混入する。粘質)



C-1 トレンチ土層説明

- 1 褐色土層 (表土、崩落土)
- 2 暗褐色土層 (暗灰褐色土、褐色土のブロックを混入する。粘質)
- 3 暗灰褐色土層 (明黄灰色 <FA?> 粒のブロックを含む。粘質)
- 4 暗茶褐色土層 (明黄灰色 <FA?> 粒、黄褐色土粒子を混入する)
- 5 暗灰褐色土層 (明黄灰色 <FA?> 粒、黄褐色土粒子、ブロックを混入する。粘質)
- 6 暗褐色土層 (黄褐色土、暗茶褐色土、黒褐色土の粒子。ブロックを混入する)



- 7 暗黄褐色土層 (暗褐色土に多量の黄褐色土を混入する)
- 8 灰褐色土層 (灰褐色粘質土に黄褐色土粒子を混入する)
- 9 暗黄褐色土層 (7層とほぼ同じ)
- 10 灰褐色土ブロック (黄褐色土粒を混入する)
- A Aトレンチと同じ
- B ~
- C ~
- D ~
- E ~
- F ~

第12図 C-1・C-2 トレンチ土層断面図 (1:40)

F トレンチ土層説明

- 1 茶褐色土層 (表土)
- 2 暗褐色土層 (黄褐色土、暗灰褐色粘質土、灰褐色粘質土を混入する)
- 3 暗褐色土層 (黄褐色土、暗灰褐色粘質土、黒褐色土を混入する)
- 4 灰褐色土層 (少量の黄褐色土と暗灰褐色粘質土を混入する)
- 5 暗灰褐色土層 (黒褐色土、灰褐色粘質土のブロックを混入する。粘質)

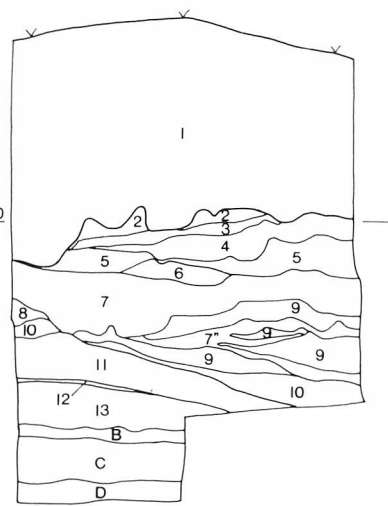
20m



- 6 暗褐色土層 (灰褐色粘質土、黄褐色土、明灰褐色粘質土のブロックを混入する)
- 7 灰褐色土層 (F A粒のブロックを含む)
- 8 暗褐色土層 (黄褐色土、灰褐色粘質土、黒褐色土を混入する)
- 9 灰褐色土層 (黄褐色土、暗灰褐色粘質土のブロックを混入する)
- 10 暗褐色土層 (黄褐色土、灰褐色粘質土のブロックを混入する)
- 11 暗褐色土層 (黄褐色土、灰褐色粘質土、黒褐色土を混入する)
- 12 暗褐色土層
- 13 暗褐色土層 (灰褐色土が主体)
- B A トレンチと同じ
- C ♪
- D' 灰褐色土層 (A トレンチD層より暗い。炭化物粒を含む。粘質かたい)
- E A トレンチと同じ
- F ♪

18,000

18,000



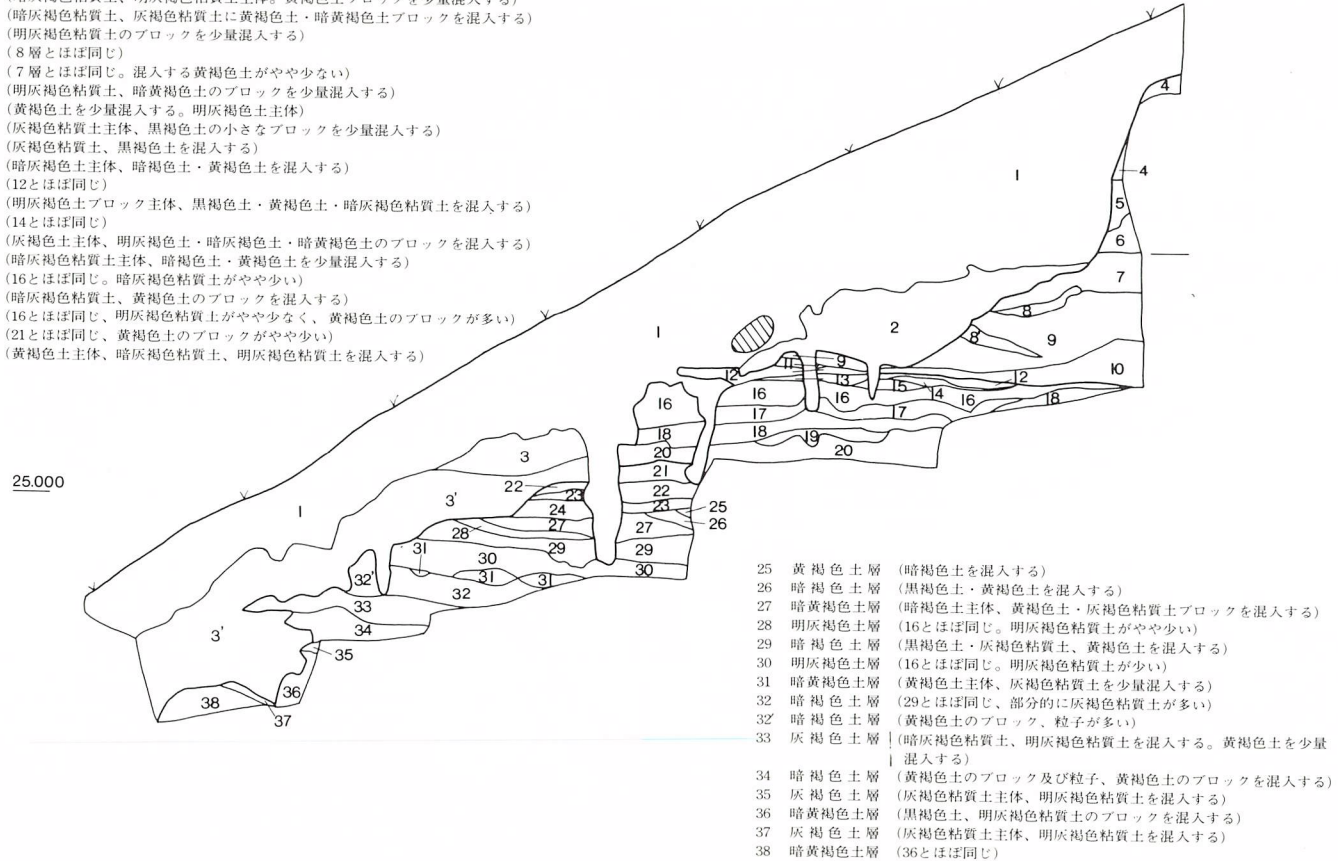
E トレンチ土層説明

- 1 茶褐色土層 (表土、崩落土)
- 2 暗褐色土層 (暗灰褐色粘質土、灰褐色粘質土のブロックを混入する)
- 3 暗灰褐色土層 (暗褐色土、灰褐色粘質土のブロックを混入する。粘質)
- 4 暗褐色土層 (灰褐色粘質土、暗灰褐色粘質土、黄褐色土、黒褐色土の混在層)
- 5 暗灰褐色土層 (3層とほぼ同じ)
- 6 暗褐色土層 (黄褐色土、灰褐色粘質土のブロックを混入する)
- 7 灰褐色土層 (暗灰褐色粘質土、暗褐色土を混入する。粘質)
- 7" 暗灰褐色土層 (明黄灰色 <F A> 粒を含む。粘質)
- 8 暗褐色土層 (暗灰褐色粘質土、黄褐色土を混入する)
- 9 灰褐色土層 (粘質)
- 10 灰褐色土層
- 11 暗褐色土層 (暗灰褐色粘質土、灰褐色粘質土、黄褐色土を混入する)
- 12 灰褐色土層
- 13 灰褐色土層 (暗灰褐色粘質土、暗褐色土を混入する)
- B A トレンチと同じ
- C ♪
- D ♪
- D' ♪ (D層より暗い)
- E ♪
- F ♪

第13図 E・F トレンチ土層断面図 (1 : 40)

Gトレンチ土層説明

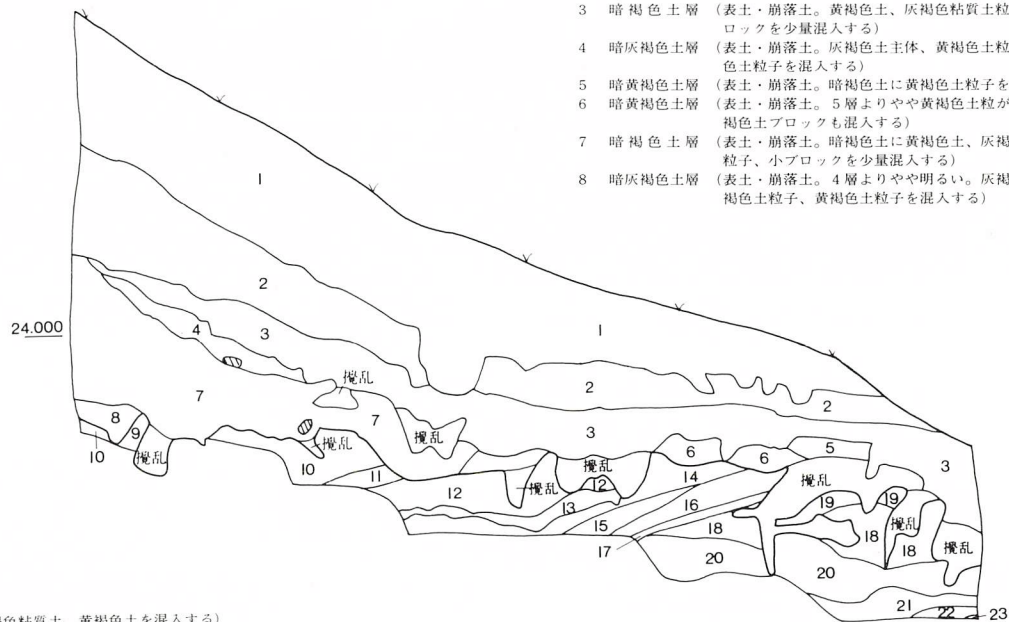
- | | | |
|----|--------|--------------------------------------|
| 1 | 茶褐色土層 | (表土) |
| 2 | 暗黄褐色土層 | (表土、暗褐色土に黄褐色土、灰褐色土、黒褐色土を混入する) |
| 3 | 暗灰褐色土層 | (表土、灰褐色土主体) |
| 3' | 暗黄褐色土層 | (表土、黄褐色土主体) } ブロックが多い |
| 4 | 灰褐色土層 | (暗灰褐色粘質土、灰褐色粘質土主体。黄褐色土を少量混入する) |
| 5 | 黒褐色土層 | (黒褐色土に少量の黄褐色土小ブロックを混入する) |
| 6 | 灰褐色土層 | (暗灰褐色粘質土、明灰褐色粘質土主体。黄褐色土ブロックを少量混入する) |
| 7 | 黄灰褐色土層 | (暗灰褐色粘質土、灰褐色粘質土に黄褐色土・暗黄褐色土ブロックを混入する) |
| 8 | 黒褐色土層 | (明灰褐色粘質土のブロックを少量混入する) |
| 8' | 黒褐色土層 | (8層とほぼ同じ) |
| 9 | 黄灰褐色土層 | (7層とほぼ同じ。混入する黄褐色土がやや少ない) |
| 10 | 黒褐色土層 | (明灰褐色粘質土、暗黄褐色土のブロックを少量混入する) |
| 11 | 明灰褐色土層 | (黄褐色土を少量混入する。明灰褐色土主体) |
| 12 | 灰褐色土層 | (灰褐色粘質土主体、黒褐色土の小さなブロックを少量混入する) |
| 13 | 暗褐色土層 | (灰褐色粘質土、黒褐色土を混入する) |
| 14 | 暗灰褐色土層 | (暗灰褐色土主体、暗褐色土・黄褐色土を混入する) |
| 15 | 灰褐色土層 | (12とほぼ同じ) |
| 16 | 明灰褐色土層 | (明灰褐色土ブロック主体、黒褐色土・黄褐色土・暗灰褐色粘質土を混入する) |
| 17 | 暗灰褐色土層 | (14とほぼ同じ) |
| 18 | 灰褐色土層 | (灰褐色土主体、明灰褐色土・暗灰褐色土・暗黄褐色土のブロックを混入する) |
| 19 | 暗灰褐色土層 | (暗灰褐色粘質土主体、暗褐色土・黄褐色土を少量混入する) |
| 20 | 明灰褐色土層 | (16とほぼ同じ。暗灰褐色粘質土がやや少ない) |
| 21 | 暗褐色土層 | (暗灰褐色粘質土、黄褐色土のブロックを混入する) |
| 22 | 明灰褐色土層 | (16とほぼ同じ、明灰褐色粘質土がやや少なく、黄褐色土のブロックが多い) |
| 23 | 暗褐色土層 | (21とほぼ同じ、黄褐色土のブロックがやや少ない) |
| 24 | 暗黄褐色土層 | (黄褐色土主体、暗灰褐色粘質土、明灰褐色粘質土を混入する) |



第14図 Gトレンチ土層断面図 (1 : 40)

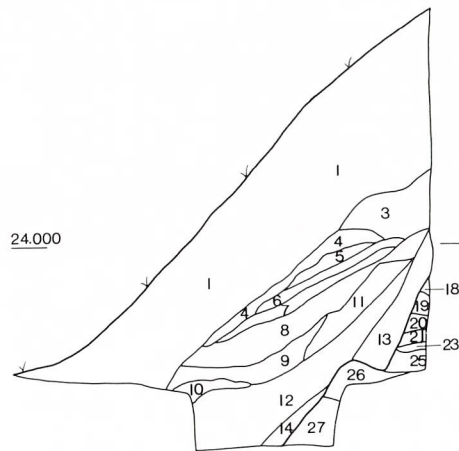
I トレンチ土層説明

- 1 茶褐色土層 (表土)
- 2 茶褐色土層 (表土・崩落土。灰褐色粘質土、黄褐色土の粒子を混入する)
- 3 暗褐色土層 (表土・崩落土。黄褐色土、灰褐色粘質土粒子、小ブロックを少量混入する)
- 4 暗灰褐色土層 (表土・崩落土。灰褐色土主体、黄褐色土粒子、暗褐色土粒子を混入する)
- 5 暗黄褐色土層 (表土・崩落土。暗褐色土に黄褐色土粒子を混入する)
- 6 暗黄褐色土層 (表土・崩落土。5層よりやや黄褐色土粒が多く、黄褐色土ブロックも混入する)
- 7 暗褐色土層 (表土・崩落土。暗褐色土に黄褐色土、灰褐色粘質土粒子、小ブロックを少量混入する)
- 8 暗灰褐色土層 (表土・崩落土。4層よりやや明るい。灰褐色土に暗褐色土粒子、黄褐色土粒子を混入する)



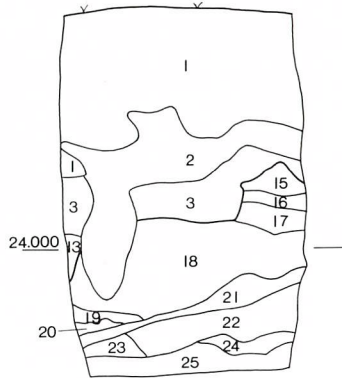
- 9 灰褐色土層 (灰褐色粘質土主体。暗灰褐色粘質土、黄褐色土を混入する)
- 10 黄褐色土層 (黄褐色土主体。灰褐色粘質土、暗灰褐色粘質土、黒褐色土を混入する)
- 11 明灰褐色土層 (明灰褐色粘質土、暗灰褐色粘質土に黄褐色土を混入する)
- 12 黄褐色土層 (10層とほぼ同じ、灰褐色粘質土が10層よりやや多い)
- 13 明灰褐色土層 (明灰褐色粘質土、暗灰褐色粘質土に黄褐色土を混入する)
- 14 黄褐色土層 (10層とほぼ同じ)
- 15 明灰褐色土層 (13層とほぼ同じ、黄褐色土粒子が少ない)
- 16 暗黄褐色土層 (黄褐色土粒子が主体。黄灰褐色土、灰褐色粘質土を混入する)
- 17 明灰褐色土層 (15層とほぼ同じ)
- 18 黄褐色土層 (10層とほぼ同じ)
- 19 明灰褐色土層 (15層とほぼ同じ)
- 20 暗灰褐色土層 (灰褐色粘質土、暗灰褐色粘質土が主体、黒褐色土、黄褐色土を混入する)
- 21 暗黄褐色土層 (16層とほぼ同じ)
- 22 暗灰褐色土層 (20層とほぼ同じ)
- 23 黄褐色土層 (10層とほぼ同じ)

第15図 I トレンチ土層断面図 (1 : 40)



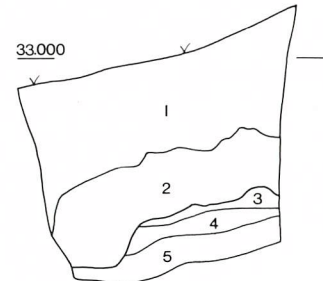
H トレンチ土層説明

- 1 茶褐色土層 (表土)
- 2 暗灰褐色土層 (表土・崩落土。明灰褐色粘質土、暗灰褐色粘質土、黒褐色土ブロック主体の攪乱層)
- 3 灰褐色土層 (表土・崩落土。明灰褐色粘質土、暗灰褐色粘質土、黄灰褐色粘質土ブロックが主体)
- 4 灰褐色土層 (表土・崩落土。3層より明るい。明灰褐色粘質土、黄灰褐色粘質土を混入する)
- 5 暗褐色土層 (表土・崩落土。暗灰褐色粘質土、明灰褐色粘質土、黄灰褐色粘質土を混入する)
- 6 茶褐色土層 (表土・崩落土。黄褐色土粒子、明灰褐色土粒子を混入する)
- 7 暗褐色土層 (表土・崩落土。5層とほぼ同じ)
- 8 暗褐色土層 (表土・崩落土。黄褐色土、灰褐色土粒子を混入する)
- 9 暗褐色土層 (表土・崩落土。8層よりやや暗い、黄褐色土を少量混入する)
- 10 暗褐色土層 (表土・崩落土。8層とほぼ同じ)
- 11 黒褐色土層 (表土・崩落土。明灰褐色粘質土、黄灰褐色粘質土の小ブロックを混入する)
- 12 暗褐色土層 (表土・崩落土。明灰褐色粘質土、黄褐色土、黒褐色土を混入する)
- 13 暗褐色土層 (表土・崩落土。灰褐色粘質土ブロック、黄褐色土粒子を混入する)
- 14 暗褐色土層 (表土・崩落土。暗褐色土、黄褐色土のブロック主体の層)
- 15 暗灰褐色土層 (黒褐色土、暗褐色土、明灰褐色粘質土のブロック主体。粘質)
- 16 灰褐色土層 (灰褐色粘質土が主体。明灰褐色粘質土ブロックを混入する。粘質)
- 17 灰褐色土層 (暗黄灰褐色土、黄褐色土、黒褐色土ブロックを混入する)
- 18 暗褐色土層 (黒褐色土ブロックと黄褐色土、灰褐色粘質土を混入する)
- 19 黄褐色土層 (黄褐色土に灰褐色粘質土を混入する)
- 20 暗褐色土層 (18層とほぼ同じ)
- 21 黄褐色土層 (黄褐色土が主体、灰褐色粘質土、黒褐色土を混入する)
- 22 灰褐色土層 (明灰褐色粘質土、灰褐色粘質土が主体。黄褐色土ブロックを混入する。粘質)
- 23 黄褐色土層 (黄褐色土が主体。灰褐色粘質土を混入する)
- 24 黄褐色土層 (21層とほぼ同じ)
- 25 暗灰褐色土層 (暗灰褐色粘質土が主体、黄褐色土、灰褐色粘質土を少量混入する。粘質)
- 26 黄褐色土層 (21層とほぼ同じ)
- 27 灰褐色土層 (暗灰褐色粘質土と灰褐色粘質土が主体。黄褐色土ブロックを少量混入する。粘質)



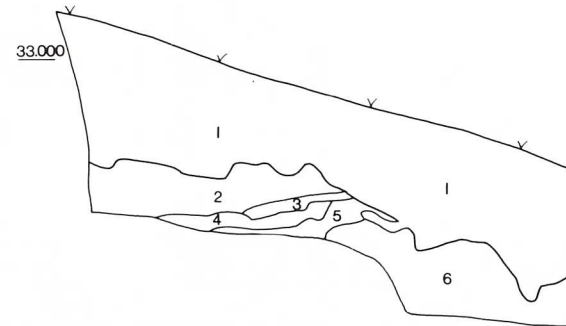
J トレンチ土層説明

- 1 茶褐色土層 (表土)
- 2 暗黄褐色土層 (黄褐色土、黒褐色土、暗灰褐色土主体)
- 3 黒褐色土層 (黒褐色土ブロック主体)
- 4 暗黄褐色土層 (黄褐色土に暗褐色土を混入する)
- 5 暗褐色土層 (灰褐色粘質土ブロック、黒褐色土ブロックに黄褐色土、褐色土を混入する)
- 6 暗褐色土層 (暗褐色土に黄褐色土、灰褐色粘質土、黒褐色土を混入する)



K トレンチ土層説明

- 1 茶褐色土 (表土。灰色味を帯びる)
- 2 暗褐色土 (表土。灰褐色粘質土及び黄褐色粒子を混入する)
- 3 暗灰褐色土 (黒褐色土、暗茶褐色土ブロックを混入する)
- 4 暗褐色土 (黄褐色土、暗茶褐色土ブロックを混入する)
- 5 〃 (〃)



第16図 H・J・Kトレンチ土層断面図 (1:40)

(2) 遺物

発見された遺物は、土師器杯片1点と、埴輪片多数であるが、現位置を保って出土したものはなかった。調査のトレンチは、墳丘及び墳丘裾に入っているが、いずれからも出土し、裾だけでなく、墳丘にも埴輪が立てられていたものと思われる。1点出土した土師器は、裾に設定したAトレンチから出土したもので、出土層位は、当時の地表下にあったF A層下である。

土師器

杯（第17図1）

全体で1/10ほどの破片から復原した。口径は、13.6cmほどであったが、小破片のため前後する大きさであろう。いわゆる模倣杯の古い形態で、器形は、口縁部がわずかに内湾している。口縁の器厚は、先端で内側をしぼり、薄くなっていた。口唇部は、器壁が荒れているためはっきりしないが、内傾し、平坦である。器面の調整も器壁の荒れではっきりしないが、口縁部は、ヨコナデ、底部は、軽くヘラ削りされている。色調は、やや赤みを帯びた黄褐色で、赤彩の痕跡は見られなかった。

埴輪

形象埴輪（第17図2～4）

2は、人物埴輪頭部額周辺の破片である。額には偏平な粘土紐の貼り付けによる、紐状のものが表現されている。その下に微隆帯の貼り付けによるまゆが表現され、その下に目の部分をヘラで穿孔している。やや赤みを帯びた黄褐色である。4は、小破片ではっきりしないが、靱の両側に付くひれの可能性がある。器面両側に縦のはけ目が施されている。各端部は、平坦であるが、端部から器面縁にかけたナデで、丸みを帯びている。色調は、他の多くの埴輪と同様、赤褐色である。3は、板状の破片である。長辺に平行してはけ目がある。

円筒埴輪（第17図5～第18図）

5～7は口縁部破片である。口唇部形態は、5、6が平坦、7は、丸棒状である。5は色調が、赤褐色、6が黄褐色、7がやや薄い赤褐色。6は内面直下に稜が走って外傾ぎみで、緩やかに外反する。他に比べて極端に薄手である。7は、強く口縁部が外反し、ヨコナデも強く、無文部が広い。

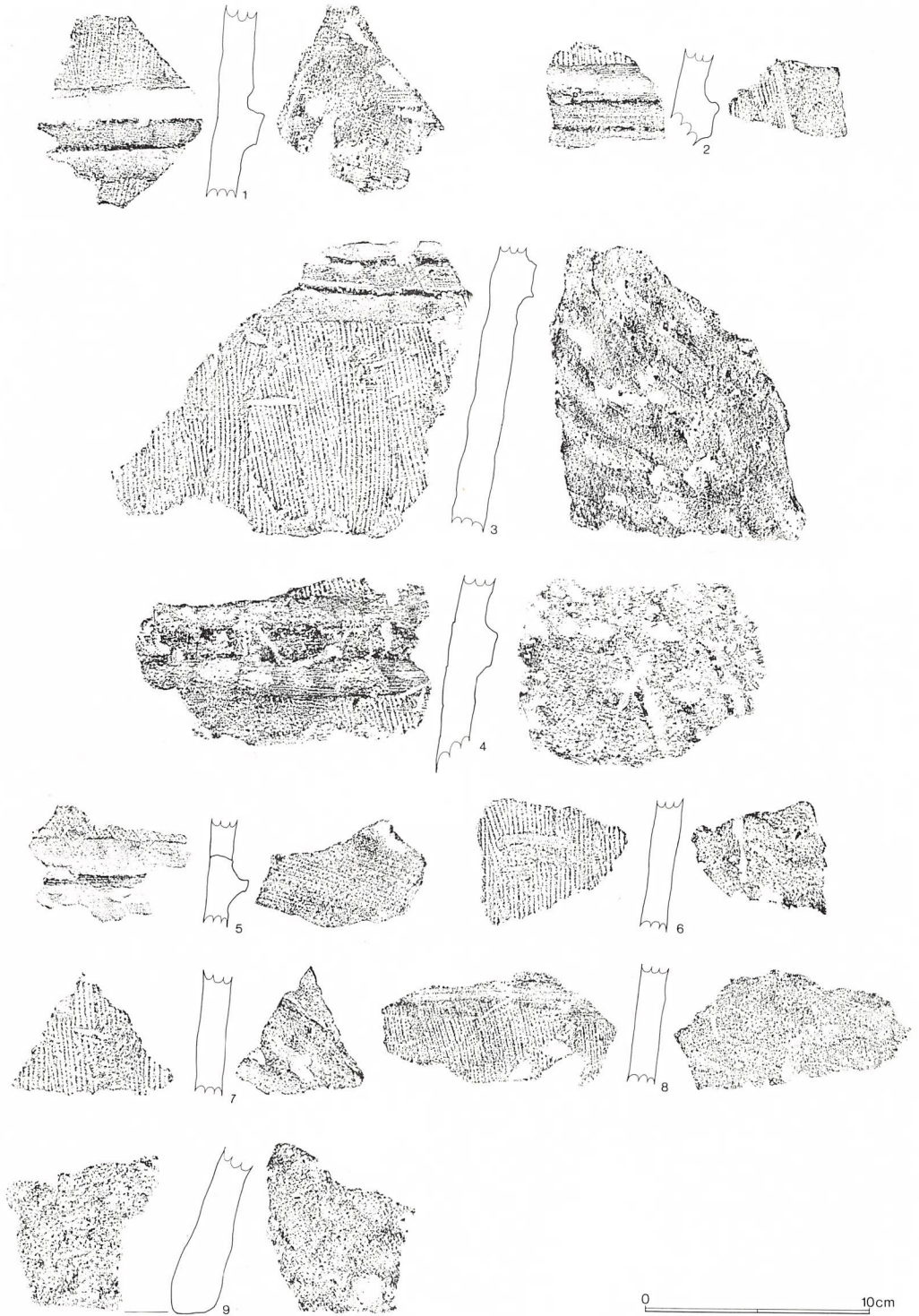
第17図8～12、第18図は、円筒埴輪胴部から底部にかけての破片である。多くは赤褐色であるが、第17図13と第18図5が黄褐色に近い色であった。第17図8～11は、内面にはけ目があり、胴部上半の破片である。他は下半の破片で、底部が1点あった。突帯は、大半が幅広く、上下に稜も走っているが、概して上端が高く、下端の稜は、低く崩れているのが多い。また、突帯の上端に引かれた凹線が深いのが特徴といえよう。第17図11は、この突帯がもっともはっきりしている例で、上下とも鋭い凸帯が走っていた。逆に、突帯の稜が崩れているものは第17図12、低いものは第18図4である。特に、4は、他の突帯の上下に引かれた凹線のあり方と比べ、上下とも浅かった。

第18図5は、他の突帯と異なり、幅が極端に狭いものである。色調も黄褐色ぎみで、他とやや異なる。胴部径の推定できたものに第17図9と第18図3がある。前者は、30cm弱、後者は、15cm弱と、半分ほどの大きさで、今回出土した他の破片は、すべて前者の大形のタイプであり、量的に少ない特殊なものといえるかもしれない。



第17図 丸墓山古墳出土遺物(1)

1・12 Aトレンチ出土、2・8・9・11 C-1トレンチ出土、3 Bトレンチ出土、
4・10・13 Dトレンチ出土、5・6 Kトレンチ出土、7 Iトレンチ出土



第18図 丸墓山古墳出土遺物 (2)

1・8 C-2トレンチ出土、2・3・6 Cトレンチ出土、4 Bトレンチ出土、
5 Aトレンチ出土、7・9 C-1トレンチ出土

3 小 結

墳丘テラス状部分に設定したC-2トレンチでは、配石遺構が検出された。これは明らかに人為的に並べられたものである。土層断面の観察では、礫の埋め込まれている土層は、ローム粒子を含んだ暗褐色土層で、墳丘構築土としては、やわらかいものであったが、検出された面が、現地表に近いこともあり、植物の根等の自然的要因により、土層の組織が崩されたものとも判断できる。また、Iトレンチでは、表土と崩落土は、墳丘中心側がきわめて厚いものであるにもかかわらず、墳丘構築土の遺存している上面は水平に近い状況であった。Iトレンチでは、墳丘構築土が墳丘中心側で立ち上がる部分までは確認できず、どのように立ち上がるか不明だが、認められた構築土上面が水平に近いことは、崩落土及び表土が現状のようになる以前には、この部分が少なくともテラス状になっていたことが推測できる。以上のようにC-2・Dトレンチで検出した礫の存在と、土層断面の状況、またIトレンチの土層断面観察の結果を考え合わせると、現況のテラス状部分は、表面が削られている可能性が高いものの、墳丘築造時のテラスで、少なくとも墳丘テラス先端近くの斜面に、葺石が存在していた状況を反映している可能性が高いものと思われる。

今回の調査で出土した土師器杯片は、Aトレンチ旧表土中からの出土である。出土した層位は、FAを含むやや白く見える帯状の層の数cm下であり、明らかにFA降下以前のものである。旧表土の堆積環境を考えた場合、低湿地のように堆積速度の高い環境とも考えられず、洪水等による一時的な堆積である状況も認められなかった。古墳の占地在周辺よりも高い、低台地上であることを考え合わせると、堆積速度は比較的遅いものであったことが推測できる。従ってFAを含む層と、遺物の間に数cmの間隙があることは、FA降下までにかなり間があったことが考えられる。

杯片は小片であるが、口縁部がやや内湾して立ち上がる器形は、丸墓山古墳に隣接する小円墳群中で古い段階と考えられる梅塚古墳出土の模倣杯^{*1)}と比較すると、より古式の様相を呈するものである。梅塚古墳出土の模倣杯は、FA降下前後の時期に比定されるもので、同様の模倣杯を出土した、熊谷市鎧塚古墳は、築造後まもなくFAが周堀に堆積した古墳と考えられている^{*2)}。丸墓山古墳出土の杯片が梅塚古墳に見られる模倣杯より一段階古いものであることは、先述のようにFA降下時との時間の隔たりが推定できることと矛盾するものではない。

現在までの調査では、埼玉古墳群内には、この時期の集落跡が認められず、また、明瞭な遺物包含層も認められていない。旧表土中に、集落跡や、その他の遺構とは無関係な状況にあるこの杯片が、埼玉古墳群造営に関わった存在とするならば、梅塚古墳に先行し、埼玉古墳群中最古の古墳であると考えられる稲荷山古墳の築造に伴う可能性が考えられるのである。

【註】

* 1 杉崎茂樹他 1988 『丸墓山古墳・埼玉1～7号墳・将軍山古墳』埼玉古墳群発掘調査報告書第6集 埼玉県教育委員会

* 2 寺社下博 1981 『鎧塚古墳』昭和55年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書 熊谷市教育委員会



丸墓山古墳近景（工事実施後）



同 上（工事実施前）



丸墓山古墳全景（東から・工事実施後）



同 上（東から・工事実施前）



丸墓山古墳全景（南から・工事実施後）

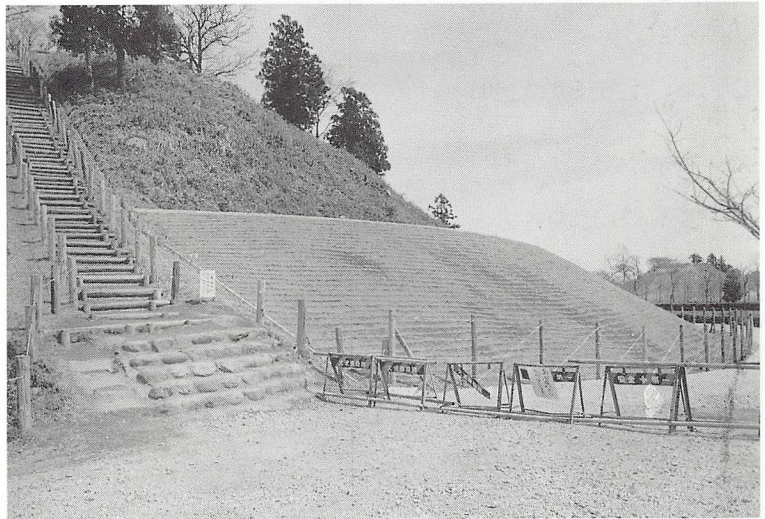


同上（南から・工事実施前）

丸墓山古墳近景
(西から・62年度工事实施後)



同 上
(西から・61年度工事实施後)



同 上
(西から・工事实施前)





墳頂部（工事实施後）



同 上（工事实施前）



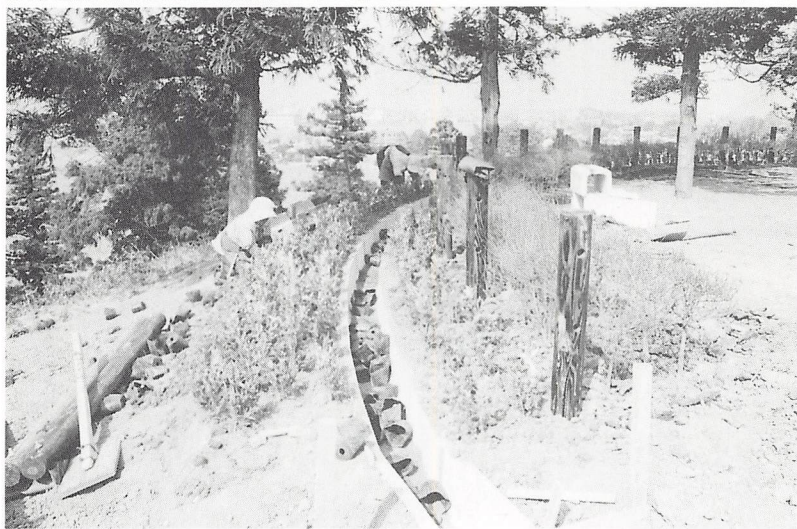
墳頂部（工事实施後）



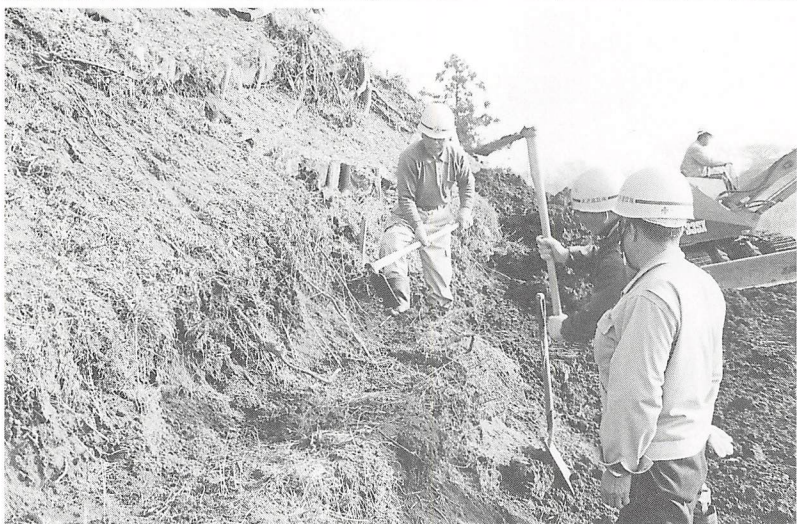
U字側溝敷設



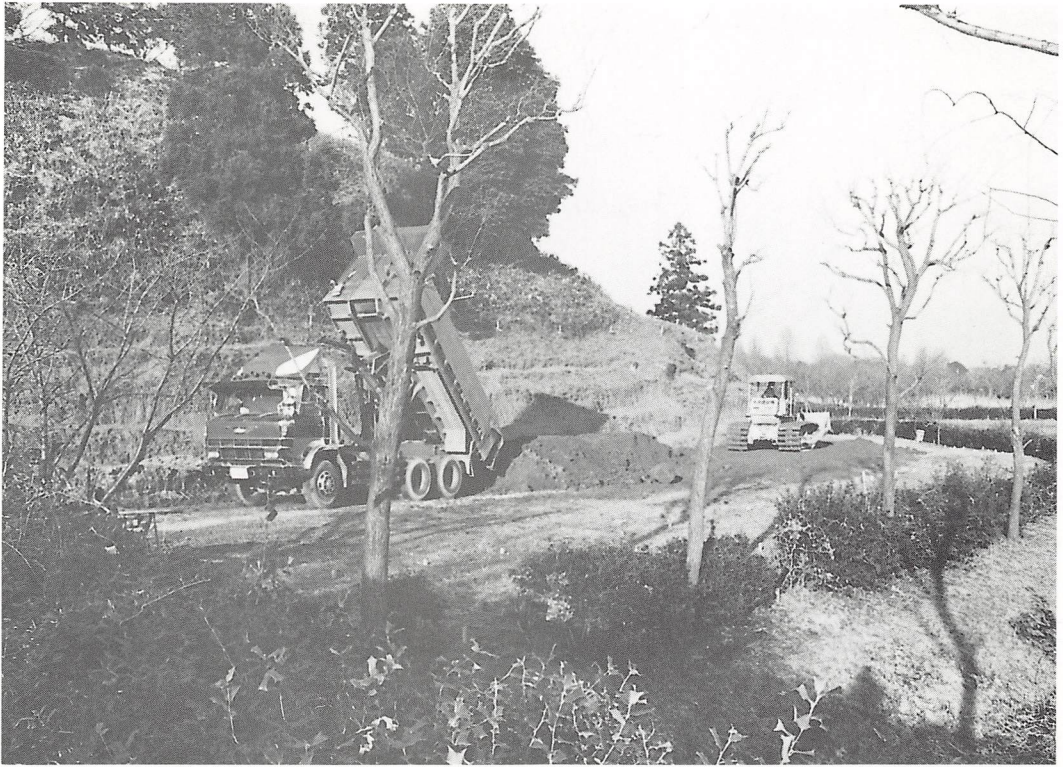
墳頂部盛土



墳頂部修景



段切り



盛土工



階段整備工



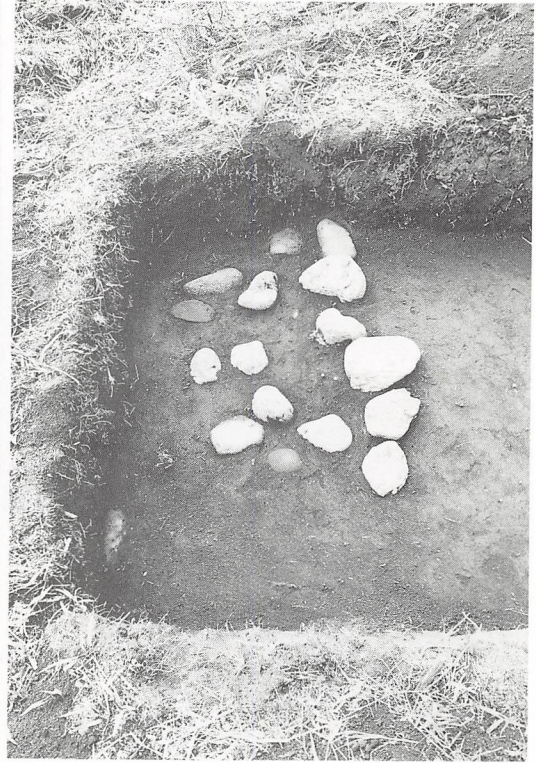
昭和61年度調査区全景



昭和62年度調査区全景



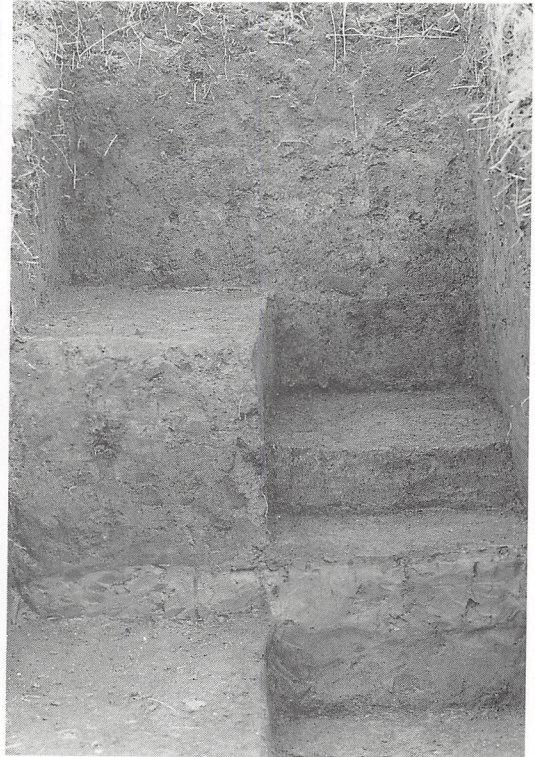
C-2 トレンチ礫出土状況



D トレンチ礫出土状況



B トレンチ土層断面



F トレンチ土層断面



Gトレンチ土層断面



Iトレンチ土層断面



丸墓山古墳出土遺物 (1)

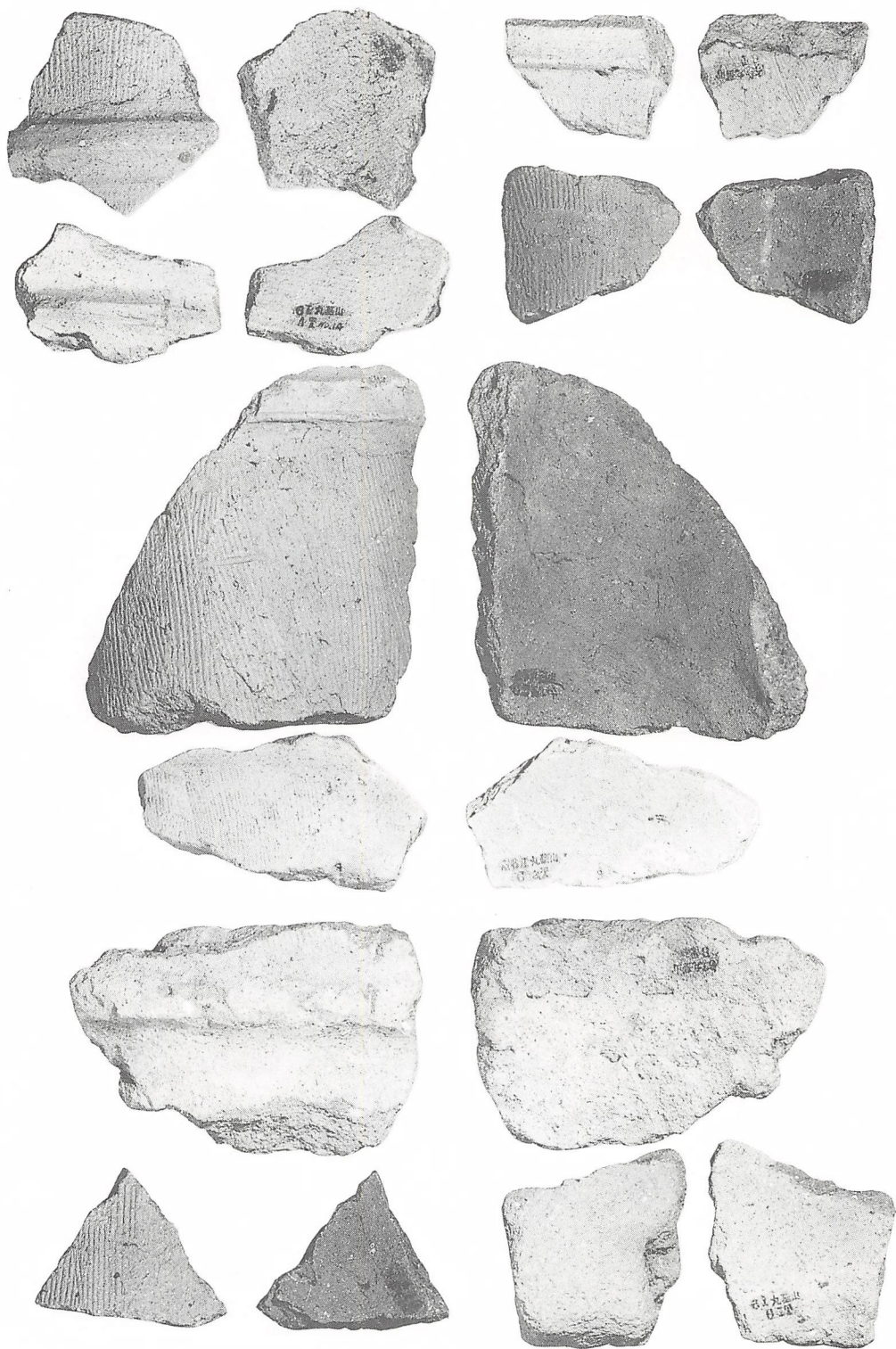


写真28 丸墓山古墳出土遺物(2)